

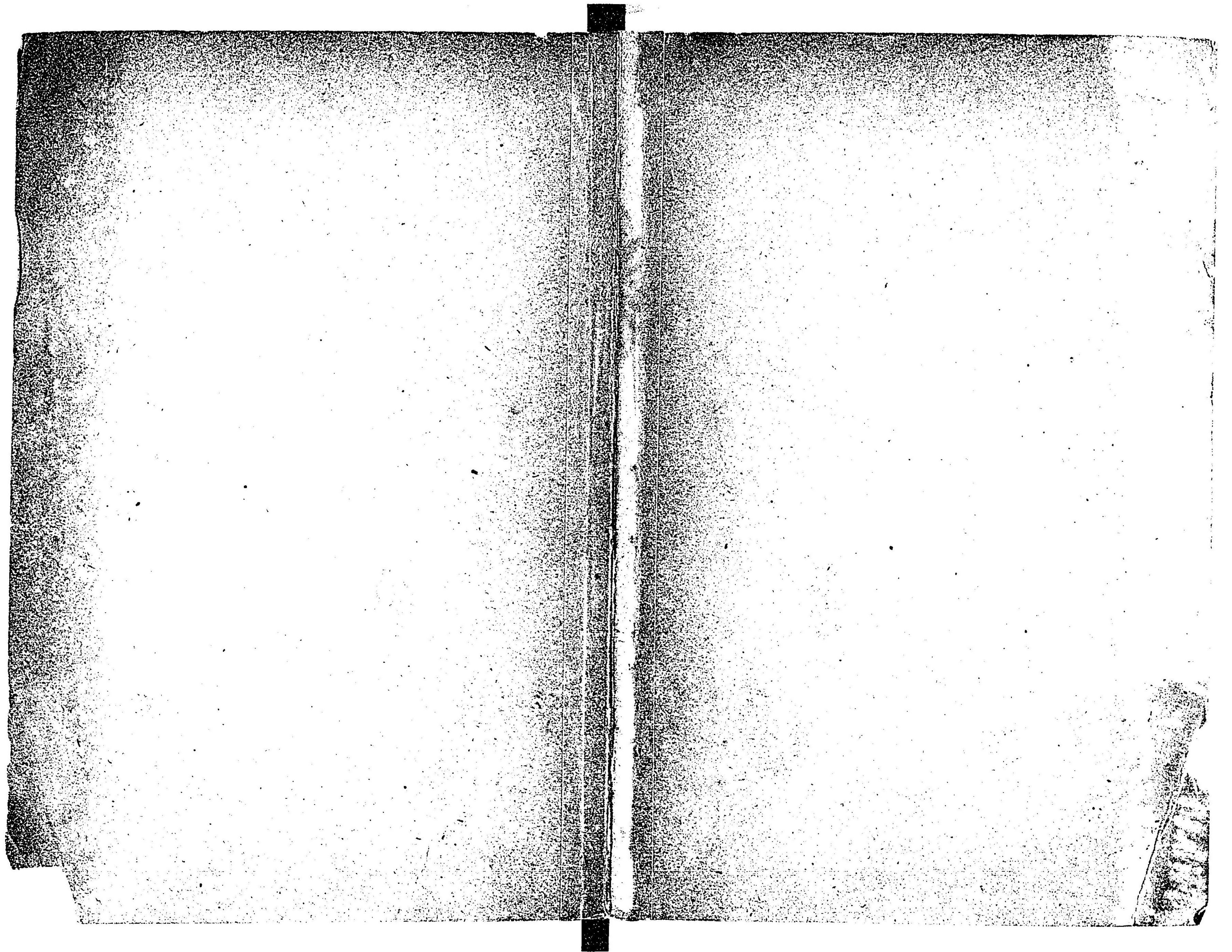
著人同洞々浩

活生的靈

京 東

兌發堂明文





特 18
323

多田 佐々木 月樵 合著
烏木 敏

靈的生活

東京 文明堂發兌

明治
37 8 17
内交

東京 文明堂發行

靈の生

野田 木目 合著



353

序

蝸牛樹枝を歩む、其跡に道あり。『靈的生活』の一篇は正にこ

れ。
我等既に世に生れたり、いかにこの一生をたくべきかは、我等に
來る問題ならずとするも得んや。

我等現に汚を嫌ひ淨を好む、いかにこの一生を清淨に過さんか
こは、我等に來る問題ならずとするも得んや。

肉に臭氣あり、肉腐る。我等肉に頼れる生活は溷濁なるかな。
世に塵埃あり、世濁る。我等世に頼るの生活は穢惡なるかな。

かくて我等に靈に頼るの信仰は芽せり。信仰に基ける生活の趣
味は經驗せられたり。この生活や安泰也、この生活や勇猛也、この
生活や至誠也、この生活や崇高也。我等世に生る、この生活を得ず

んは夫れ禽獸に近からんか。

『靈的生活』の一篇は過去一年間に於ける我等が靈に導かれたる生活の跡也。之を世に示す聊か嗚呼かまじきに似たり。されど一片耿々の情之を一書に綴るの念止まず。敢て世に公にす。

我等は本書の中に恩師清澤先生が我等と共に記されし一文を載するの光榮を、師の死に依りて受けたる靈感の記載を撮めたる歡喜こそ、靈の父に感謝し奉る。

靈の淨土にまします先生よ。我等は先生の導きに依りて、靈に接するを得、夫によりて得たる生活の記を今日先生の一周忌紀念の爲めに先生の靈前に捧げまつる。先生願はくは御心を加へさせ給ひてこの書をして先生の愛し給ふ世の人々の間に頒たしめたまへ。

明治三十七年四月下旬

多田鼎
佐々木月樵
曉鳥敏

目次

- 一 敬白……………(一)
- 二 勇猛精進の氣魄……………(六)
- 三 年若き傳道者……………(三)
- 四 唯一の標準……………(一五)
- 五 汝に平和を與ふる者は汝也……………(一七)
- 六 勝利の生活……………(一九)
- 七 宗教と生活……………(二〇)
- 八 眞理の證明は眞理にあり……………(二五)
- 九 大小強弱……………(二六)
- 一〇 教室の宗教……………(二八)
- 一一 宗教界の罪惡……………(三〇)

- 一一 信仰の冷熱……………(三)
- 一二 南枝の梅花……………(三)
- 一三 英靈底の手脚……………(三)
- 一四 相互の感謝……………(六)
- 一五 貝原益軒曰く……………(二)
- 一六 蛤……………(三)
- 一七 黙想……………(四)
- 一八 春の野春の山(山家集を讀みて)……………(五)
- 一九 岐路に立ちて……………(七)
- 二〇 成功の人……………(九)
- 二一 悠久……………(五)
- 二二 道の友……………(五)
- 二三 雲雀閑話……………(五)

- 二五 活路は開かれたり……………(五)
- 二六 明朝……………(六)
- 二七 貧及び病……………(六)
- 二八 知られざりし同情……………(六)
- 二九 他力の救濟……………(七)
- 三〇 不可解……………(七)
- 三一 藥也……………(七)
- 三二 那先比丘曰く……………(七)
- 三三 舊知己……………(七)
- 三四 如來を信すれば足れり……………(八)
- 三五 何等の啓示……………(八)
- 三六 感謝の辭……………(八)
- 三七 大安心の境……………(八)

- 三八 舊青山……………(九)
- 三九 無理なき生活……………(九)
- 四〇 我等に退歩なし……………(十)
- 四一 千篇一律の徳言……………(十)
- 四二 廻灯籠……………(十)
- 四三 形相及び靈體……………(十)
- 四四 人の一生……………(十)
- 四五 二宮尊徳曰く……………(十)
- 四六 歡樂の中に於ける反省……………(十)
- 四七 月夜の感……………(十)
- 四八 如來は生命也……………(十)
- 四九 天地の殺活……………(十)
- 五〇 爾は常に爾たり……………(十)

- 五一 顯在の人潜在の人……………(十一)
- 五二 三浦安貞曰く……………(十一)
- 五三 如來の我を信じ給ふこと……………(十一)
- 五四 眞實の經典……………(十一)
- 五五 勞働の本義……………(十一)
- 五六 力を信せよ……………(十一)
- 五七 信念を主とする生活……………(十一)
- 五八 實りぬ落ちぬ……………(十一)
- 五九 定めなき世……………(十一)
- 六〇 流星賦……………(十一)
- 六一 佛實に在り……………(十一)
- 六二 晴雨物語……………(十一)
- 六三 默想……………(十一)

- 六四 佛恩……………(一九)
 - 六五 外に狭く内に深く……………(二〇)
 - 六六 慕直進前……………(二一)
 - 六七 簡潔明瞭の信念……………(二二)
 - 六八 三九郎庄松問答……………(二三)
 - 六九 足らざる物は補はるべし……………(二四)
 - 七〇 年と別るゝの辭……………(二五)
- 以上

靈的生活

浩浩洞同人著

一。敬白

我等を助け給ふ御力、我等を憐み給ふ御親、我等今爾の膝下に額つき
 爾か我等に與へ給ひし榮光を、爾に對して敬白するを得るの歡喜を感
 謝す。

如來よ、爾は天地の間に於ける至高至深又靈躰にまします。爾は乾坤
 に満てる至善至美の靈相にまします。爾は萬有に亘れる無上殊勝の靈
 用にまします。我等無量永劫の初事に今生に爾の御心を知り、爾の尊容
 を拜するを得るに至りしは何たる榮譽ぞや。我等は地の寶に富まず。

れ○の○爾○の○御○光○の○裡○に○あり○て○爾○が○與○へ○給○ふ○事○物○を○以○て○満○足○に○た○ち○歸○り○
つ○い○あ○る○我○等○は○幸○な○る○か○な○我○等○に○は○人○の○智○は○あ○ら○す○人○の○力○は○あ○ら○す○
さ○れ○ご○爾○の○智○慧○に○よ○り○爾○の○御○力○を○た○の○み○て○安○心○と○平○和○と○を○得○つ○い○あ○
る○我○等○は○幸○な○る○か○な○

如○來○よ○我○等○は○永○劫○の○昔○よ○り○爾○御○親○の○御○心○を○知○ら○す○御○力○を○疑○ひ○つ○
迷○ひ○に○迷○ひ○を○重○ね○悶○ね○に○悶○ね○を○重○ね○つ○終○に○今○生○に○至○れ○り○然○る○に○幸○
な○る○か○な○我○等○は○こ○の○度○永○却○我○等○の○た○め○に○心○を○碎○き○我○等○の○た○め○に○身○を○
摧○き○ま○し○ま○す○御○親○の○慈○悲○の○懷○に○入○る○を○得○た○り○我○等○は○我○等○の○財○寶○の○多○
か○ら○ざ○る○を○怨○ま○す○智○能○の○煥○發○せ○ざ○る○を○悲○ま○す○身○躰○の○壯○健○な○ら○さ○る○を○
苦○ま○す○た○い○偏○へ○に○所○謂○艱○難○の○間○に○あり○て○我○等○が○慰○め○と○な○り○我○等○が○安○
住○處○と○な○り○我○等○が○基○礎○と○成○り○給○ふ○爾○御○親○を○我○等○の○真○の○御○親○と○し○て○信○
ず○る○に○至○り○し○こ○と○を○喜○ば○す○ん○ば○あ○ら○す○あ○い○こ○れ○不○可○思○議○の○因○縁○に○し○
て○微○妙○の○恩○惠○に○あ○ら○ざ○ら○ん○や○

我○等○は○罪○多○き○者○な○り○故○に○罪○の○子○な○る○が○如○く○思○ひ○し○こ○と○あ○り○き○我○等○
は○悶○え○多○き○者○也○故○に○悶○の○子○な○る○が○如○く○思○ひ○し○こ○と○あ○り○き○我○等○
れ○ご○能○く○能○く○思○ひ○見○れ○ば○我○等○は○罪○の○子○に○も○あ○ら○ざ○り○き○悶○ね○の○子○に○も○
な○ら○ざ○り○き○而○し○て○我○等○は○罪○を○超○脱○し○悶○え○を○洗○淨○し○た○る○靈○體○あ○い○爾○慈○
悲○の○御○力○は○我○等○の○親○な○り○け○り○我○等○今○日○ま○で○こ○の○御○親○を○離○れ○て○罪○に○行○
き○ぬ○悶○え○に○去○り○ぬ○而○し○て○罪○の○子○の○如○く○悶○ね○の○子○の○如○く○思○ひ○し○は○淺○は○
か○な○り○け○る○か○な○然○る○に○今○は○明○に○真○の○御○親○を○知○る○に○至○れ○り○真○の○御○親○の○
慈○顔○に○接○し○て○始○め○て○我○等○の○こ○の○凡○體○の○血○統○正○し○き○こ○と○を○知○る○を○得○た○
る○は○何○た○る○歡○喜○ぞ○や○我○等○に○罪○多○し○悶○ね○多○し○今○日○に○て○も○耻○か○し○な○が○ら○
罪○に○落○ち○悶○え○に○流○れ○が○ち○の○賤○奴○也○さ○れ○ど○こ○の○賤○奴○は○今○や○靈○體○の○一○部○
分○た○り○如○來○の○獨○り○子○た○る○を○信○せ○ざ○る○を○得○さ○る○に○至○れ○り○こ○れ○我○等○が○有○
す○る○力○に○よ○り○て○に○あ○ら○す○し○て○爾○の○導○き○に○よ○れ○り○我○等○人○と○生○れ○て○爾○に○
逢○ふ○こ○と○を○得○た○る○の○歡○喜○は○帝○王○の○位○を○以○て○匹○す○べ○か○ら○す○天○下○の○富○を○

以ても憐ふべからず思へば思ふほど奇なりわいこの賤奴は今やかゝる高尚なる自覺の境に入れり。

如來よ我等は常に爾を憶はずされど爾は常に我等の上におり我等は爾を離れて罪に行き悶えに去るされど爾は常に我に影の如くに副ひたまひて我等を昌平温和の光明の懷に立ち歸らしめ給ふ我等は時にあられもなき邪念に耽り時に耻かしく妄念にほだされがちの身也されど如來爾は御心廣くましまして常に我等のふがいなきを憐れみその惠の御手を加へさせ給ひて我等をして最後の勝利者たらしめ給ふ我等の終極を光明界たらしめ給ふ如來よ我等は爾の御力を信ずることによりて光明の未來を得て希望に満てる人生を得たるを感謝し奉る。

如來よ我等は爾の恩澤によりてかの櫻の花を自己の皮膚と感ずるに至れりかの柳の芽を自己の毛髮と感ずるを得たり天上の星は我等

が眼ならずや地上の花は我等の眉ならずや政治經濟機械軍艦罪惡道徳其他萬般の事物皆これ我等が手也足也爪也指也と感ずるに至りて我身は幸多きかな如來よ爾は我等にこのけだかき趣味を與へ給ひしは何たる慈愛ぞや我等は謹んで爾に感謝し奉る。

如來よ爾は判官の如し我等が岐路に迷ふ時常に我等に囁き其行くべき路を教へて我等の精神に判斷を與へ給ふ我等一度この判斷を如來より得來るやそを爲す所に靈用の加はるを知るが故に我等は躊躇なく恐怖なくて勇猛精進するを得る也かくて我等の人生に希望の光はかゝりやけり自由の水は湧けり。

如來よ我等は我等の衣を脱して裸體の儘に爾の前にたちし時我等に爾の光明の花を與へ給ひぬされど晴衣着たる小兒が土を翫ぶが如く我等は常に汝の給ひし衣を汚しつゝありされど爾は之をも怒りたまはで常に汚れしを脱かして清らかなる新衣を與へ給ふぞうれし

如來よ我等は爾より受けたる廣大の恩恵に報ゐんと欲し而も力弱
 くて叶はずたゝ爾の御名を稱へまつらむ御名を稱へて爾の行はしめ
 給ふ所を行ひ爾の云はしめ給ふ所を云ひ爾の思はしめ給ふ所を思ひ
 つゝ終に爾の御國に往かん爾何卒我等に來らせ給ひて我等をして常
 に爾の御心の儘にあらしめ給へ南無阿彌陀佛

二。勇猛精進の氣魄

如來は無上法皇也

世の帝王の坐は國民の心の向背によりて動くことあらむ他の強き
 帝王の暴力の爲めに轉せらるゝことあらむされど如來は永久動かざ
 るなり如來は萬世に轉せざる無上の法王也如來法王の坐を動かす國

民はあらざる也如來法王の冠を奪ふ暴王はあらざる也

如來は最強の威力也

百萬の軍勢一時に攻め來るも之に負くることなきは如來也英の海
 軍に露は陸軍を合して攻めんかいかなる國と雖も直ちに亡びむされ
 ど如來の國は英の海軍に露の陸軍は物かは全世界の海陸軍の精英を
 以て向ふも聊も害せらるゝことなき也

この無上法王の如來今は身を細めて我等の心の裡にありこの最強
 の威力の如來今は其全力を我等に興へて我等を助けんと働きつゝお
 はすあり之を知る時我等身の賤しきと力の足らざるとを卑下して徒
 らに泣くを以て止むべきにあらざる也我等自ら我等の實力如何を顧
 みれば風前の燈の如く猫に捕へられたる鼠の如く弱き者也故に我等
 が我等のみの力を以て世に起つとせばこの劇烈なる生存競走の舞臺
 に起ちて如何ぞ能く人を制し身を立つるを得べけんや之を思ひ惟を

思ひて我等は世を恐れ、人に怖ちすとすも得んや。されど我等一度、如來の我等に宿り給ひ、我等の一舉一動に如來の威力の加はり給ふを知る時、我等には恐るべき敵なく、怖つべき仇はあらざる也。

刃を以て對はんと欲する者は、刃を以て對へよ。銃を以て對はんと欲する者は、銃を以て對へよ。我等はかゝる者の前に何等の恐怖なし。故に我等は自ら爲すことが如來の命なりと感じたる事を爲すには、白刃の前をも辞すべからざる也。銃丸の中も厭ふべからざる也。

毒筆を以て對はんと欲する者は、毒筆を以て對へよ。惡口を以て對はんと欲する者は、惡口を以て對へよ。我等はかゝる者の前に何等の恐怖なし。何となれば我等には、世の總ての物の勝つ能はざる大威神力の加はりつゝある事を頼めば也。釋尊茲に見るありて、王宮を棄てつゝ、如來の定慧は、究暢極りなく一切法に於て自在を得たりと宣ひ、エビクテタス。茲に見るありて、奴隸の位置にありつゝ、我は一切の外物の爲めに害

せらるゝ事なしと叫びぬ。

我が道の友よ、大膽なれや、勇猛なれや、汝の行く所には常に無上法王の如來は副ひ居ます。なるぞや、汝の爲すことには常に如來の大威神力の加はりつゝあるなるぞや、精進なれや、無倦なれや、汝の行く手には希望の光明は輝けり。いかなる難に遭ふも屈せされ、如何なる不幸に遭ふも撓まざれ。汝は自ら最後の勝利者なることを確信して、勇猛慕直に進前せよや。

今の世の人に缺けたるは勇氣也。勇氣なき者は怯懦也。怯懦なるものは道の器にあらざる也。勇氣なるかな人の苦むも之なきが爲め也。人の悲むも之なきが爲也。されば大なる勇氣を得來る事は樂の本也。喜の源也。勇氣とは何ぞや、勇氣とは身體の強きを云ふにあらず、辯舌の流るゝが如きを云ふにあらず、勇氣とは強き者にもあるべく、弱きものにもあるもの也。我等に若し勇氣なるものあれば、それは強者のそれにあらずし

て弱者のそれなる也。

勇氣は確信より來る也。眞の勇氣は如來の威神力の我に加はりつゝ、おはすど信ずるとによりて得來らるべき也。故に力の強弱によらずして勇氣は得らるべき也。世の人は思へり、力の強き者争ふて勝つ者にのみ勇氣は存すと。之れ未だ究めざるの語也。之れは股をくぐりし韓信を勇なしとし、韓信をして爾せしめし市井の無賴漢を勇ありとするに同じく、當れるの言と云ふべからざる也。眞の勇氣は恐怖なきに來る恐怖あるは勇氣なき也。故に親鸞聖人を害せんとしたる山伏辨圓は勇者にあらずして、之を怖れざりし聖人は眞の勇者なりし也。醉象を放ちて釋尊を害せんとしたる提婆達多是勇者にあらずして、之に怖ちざりし釋尊は眞の勇者なりしなり。十字枷上に基督を殺したる羅馬帝國は勇者にあらずして、之に恐る所なかりし基督は眞の勇者なりし也。國外にエピクテタスを放逐したる羅馬の民は勇者にあらずして、追放を苦まざ

りしエピクテタスは眞の勇者なりし也。毒を以てソクラテスを殺したる希臘の民は勇者にあらずして、之を恐れざりしソクラテスは眞の勇者なりし也。害するものは怖れを以て害し、害せらるる者には怖れなし、故に害するものに勇なく、害せらるる者に勇ある也。かくて勝つ者のみが勇ありと思ふ可らざる也。

力の點より云へば大砲の如き常陸山の如きは、日本一の力士と稱すべからむ、而も彼を以て日本第一の勇者とは名くべからざる也。かくて勇氣なるものは、力の有無によらざることを知るべき也。

されば弱者にも勇氣あり得べく、強者にも勇氣あり得べき也。今の世の人に勇猛精進の氣の無きは、力なきにあらずして、確信なきが致す所也。大に頼る所なきが致す所也。要するに、我等に勇氣の湧き來らざる時には、我等が如來の威神力の我等に加はりつゝあることを忘れたるに由る也。國民に元氣のなきは、如來を信せざるが故也。國民の上に無上法

王の御力の加はることを信ずる者は幸福なるかな何となれば彼は之に全世界を敵として恐れざるの勇氣を得たれば也
 わか道の友よ如來は常に我等の上におあり如何ぞ奮はざるべけんや
 汝に與へられたる唯一の珍寶を空しからざらしめよ

三。年若き傳道者

年若き傳道者道を宣べ了りて其講壇より退くや渠が衷心に晒ふが如く罵るが如く又警むるが如く叫ぶ者あり曰く爾は果して能く自ら説きし所の如くなるや否やとこの聲を聞く時何人も慚愧として安する能はず時としては全身の震慄をさへ覺ゆる也されども渠は之に屈すべからずたゞ宜しく毅然として之に對して言へ
 道の尊くして而も我の賤しき今更いふを要せじいかで我自ら道に

背かずといふを得むされど思ふ賤しき我に今や尊き道を宣ふべきの使命降り道に背くの我に道を傳ふべきの大令來る是れ豈に偶爾の因縁ならむや蓋し是れ如來が我唇を通して表はしたまへる大道によつて我に聽く者と我とを俱に啓發し俱に感化せむと欲したまふが爲めに外ならじされば我賤しからは賤しきほど道に背けば道に背くほど益多く斯大道を宣傳すべきにあらずや

若し如來を我として説き如來の開きたまへる道を我開ける道として説かば偽れりと云ふべからずされど如來を如來とし如來の道を如來の道として説く何の偽か其間に在らむ

經驗少き醫師は人を殺す經驗少き傳道者亦人を誤まるあらむといふか嗚呼是れ傳道の何たるを知らざるの言也醫は自己の經驗にたより自己の技能を病者に加へむと爲さむも我は決して自己の經驗にたよらず私の技能を振回はさざる也我は唯自己の知り得たる如來の經

驗に憑る也。我の語り得る如來の大道を語るなり。我に表はれ得る如來の能力を表はす也。我經驗の多少、脩養の有無は、我説ける大道の價値を上下する者にあらざる也。

經典は一片の古紙にあらすや、其文字は數點の墨汁にあらすや、されど靈活の感化は、其中より讀者の衷心に突き來るにあらすや、我は賤しされど道を表はす我聲と我語とは、其中に無限の靈能を有する也。此聲や、我の聲に非ず。如來の聲也。此語や、我の語に非ず。如來の語也。

此聲と此語とが、愈多く我舌と我唇との上に現はれ來つて、愈多くの靈化を、人と我との上に受け、竟に人と我とをして、此聲と此語とが表はせる斯大道に應同せしめむと期す。我は毫も其不可なるを見ざる也。傳道の聖職は、心の尊き者のために設けられたるものといはむより、心の賤しき汚れたる者の上に與へられたるものといふべき也。

* * * * *

四。唯一の標準

我が心漸く修め得られたりとして、喜ぶ勿れ、たゞ如來に救はれたるを喜べ。我が心追々清らかなれりとして安する勿れ、たゞ如來の大悲に接したるに安せよ。猶進むでいふ。我が信仰、頗る固きを加へたるが如しとして、我安んずべしと思ふこと勿れ、たゞ如來の救、固ければこそ、自己安らかなれと思へ。我所信甚だ其明白を加へたるが故に、我安心すべしと思ふこと勿れ、たゞ如來の救明かなればこそ、我安心すべしと思へ。我等の見る所は、常に我にあらすして、一に我上に在る。彼救濟に在るべき也。

若しそれ然らずば、我心は變易常に已まず、變易已まざる我心を見る。我亦常に動搖已まざらむ。我既に我を見ず。又我友を見ること勿れ。若し我、我友を見れば、我は渠等が我よりも厚き感謝の生活を送るを見む、我は

渠が我よりも清かなる起居を進むるを見む。殊に渠が我よりも一層信仰の堅固にして且つ雄烈なるを表はすを見む。この時我心動かむ。されば此時決して我友を見ざれ。縦し見る事あるも、彼の感謝と彼の道徳と、決して渠に於て貴ぶべきものにあらぬを思へ。渠に於て貴ぶべきは、たゞ渠が我と同じく認め得たる如來の救濟より他にあらぬを思へ。かくて我が心常に安らかならむ。

我心のすがたを思ひ、他人のありさまを望む。而して信仰の強弱をいふは、是れ猶動搖の人也。隨て苦惱の人也。信仰は唯一也。絶對也。其上には強弱なき也。我等は常に動かす變らざる唯一救濟の靈能をのみ。我心の標的と爲すべき也。かくて我に永遠の安立あるべき也。

* * * * *

五。汝に平和を與ふる者は汝也

道友よ、汝は平和を冀へり、されど、汝は山に入りて昆布を求むるが如きことを爲しつゝあるにあらざるやを反省せよ。汝は平和を社會の組織に求めつゝあるにあらざるか。而して又汝は家庭の風味に平和を求めつゝあるにあらざるか。若夫れ、汝かくの如き願望を有せんか、そは遂に空しからむ。猿が水中の月を握まんとしたるが如く無効に終らむか。

エマソン曰く、汝自身の外に、汝に平和を與ふる者はあらざる也。主義の勝利の外に、汝に平和を與ふる者はあらざる也。

知れ、汝に平和を與ふる者は汝自身也。汝自身にして平和を汝に與へずんば、將何物か汝に平和を與ふる者ぞや。汝の心に宇宙の眞理に頼るところなく、永遠の生命に逢着したる主義なからんか。汝は終に平和を得るの人のあらざる也。汝自ら精神の平和を得ざらんか。いかにかに外界の

境遇整ひたりとて汝は平和の主にはあらず之に反して汝自ら精神の
 平和を得んか外界いかに擾乱するとも迫害いかに汝を襲ふ共汝は汝
 たり何物も汝より平和の桂冠を奪ふこと能はざる也。

汝の精神に平和を與ふる者は何ぞや主義の勝利は應に之なるべし
 その主義の勝利とは何物ぞや宇宙の眞理は應に之なるべしその宇宙
 の眞理とは何ぞやこれ佛陀の精神也無限の慈悲なりさればこの無限
 の慈悲はいかにして汝に平和を與ふるか無限の慈悲を信する者は自
 己の内心に無限の平和を得たるの人也。

既に自己の心内に平和の基礎にして置かれんか社會平和の柱はこ
 の上に建てられむ國家平和の棟はこの上に建てられむ家庭平和の屋
 根はこの上に葺かれむ。

*

*

*

*

*

*

六。勝利の生活

我等の生活が佛體に没する時靈的生活は來るなりされど道友よ我
 等は常に靈的生活に住する能はざるを如何せむ我等は時に靈の力を
 感せざることあり時には弱くなつてその力を失ふことあり我等は折
 々誘惑に落つることありされど喜ばしいかな我等はこの間にありて
 直ちに直しき生活に歸るを得る也我等は時に肉慾の奴隸となること
 ありされどこれは長き時の間にはあらざるなり婦人が出産の苦痛を
 感ずる内直ちに小兒を得たる喜びの來るか如く我等も一時は肉慾の
 苦縛に逢ふも直ちに光明の新方面の開かれて靈的生活に到り得るぞ
 うれしき故に我等はこの生活を名けて勝利の生活と名けんぞす。
 勝つ者は如來の御心也靈感の作用也負くる者は凡情也肉慾の私也
 今に至りて我等に三毒の煩惱は屢々起れ共まことの信心は彼等にも

障へられずの聖語の眞味を嗜み得るに至りしこと何たる幸福ぞや。

* * * * *

七。宗教と生活

書を読みつゝある人よ、先づ自ら問へ、「我畢竟何を讀みつゝあるか」

筆を執りつゝある人よ、先づ自ら問へ、「我は畢竟何を書きつゝあるか」

互に論じつゝある人々よ、先づ自ら問へ、「我は畢竟何を論じつゝあるか」

工場に、市場に働きつゝある所の人も、野に耕しつゝある人も、家に紡ぎつゝある人も、皆共に現在おのがなしつゝある所のことに就て、自ら問へ、「我は畢竟何をなしつゝあるか」

かくて考一考せよ、若し爾等是非讀まざるべからずと思ふならば、何の爲めに讀まざるべからざるか、必ず書かざるべからずと覺ゆるならば、何の爲めに書かざるべからざるか、働くは何の爲めに耕すか、耕すは何の爲めに耕すか、紡ぐは何の爲めに紡ぐか、爾等かく問ひかく考へよ。必ずや、如來は爾等の爲めに爾がなさいるべからざることと、爾がなすべからざることとを教へ給ふべければなり。

自ら何を讀みつゝあるかを自覺し、何の爲めに讀まざるべからざるかを考へて、爾が讀む所の書到底捨ること能はずんば、これ爾の讀まざるべからざるの書なり、爾は如來の書を讀みつゝある也、如來の行を行じつゝあるなり。

自ら何を書きつゝあるかを自覺し、何の爲めに書かざるべからざるかを考へて、爾が書く所の筆斷然抛つ能はずんば、爾は書かざるべからざることとを書きつゝあるなり、汝は如來の徳を歌ひつゝあるなり、如來

の行を行じつゝあるなり。

自ら何を論じつゝあるかを自覺し何の爲めに論せざるべからざるかを考へて爾が鋭き所の語一層その度を加ふることならば爾は論せざるべからざることを論じつゝあるなり爾は如來の爲めに論じつゝあるなり如來の行を行じつゝあるなり

その工場に行く人と市場に働く人どを問はず野に耕す人も家に働く人も皆な共に何の爲めに何をなしつゝあるかを考へて然かもその行くべく働くべく耕すべく紡ぐべきを自覺する人は今日爾が是非なさるべからざることをなしつゝある人なり行はざるべからざることを行ひつゝある所の人なりこれ即ち如來の行を行じつゝある人なり

然らば爾等日々爾がなす所を以てつまらぬと思ふ勿れ爾等は皆是如來の行を行じつゝあるものにあらずや若し人書をすてんか世に

教の光失するを如何にせむ若し人筆をすてんか如來の徳は何人によつて傳へらるゝを得べきそや若し夫れ野に耕す人なくんば人は飢え家に紡く人なくんば遂にこの寒暑を如何かする然らば如來の智慧如來の徳用如來の慈悲は近く汝が日になす所の上に存するにあらずやかく思ひかく考ふるの時如來我に來り我を慰め我を勵まし必ず我がなさいるべからざることを爲さしめ給ふこれ實に我がなさいるべからざることなり如來が我等をして日々なさしめ給ふ所のつとめなり

爾が忠實に讀みつゝあるの時爾の心のうちに種々の邪念の生ぜざるは爾が如來の行を行じつゝあるが故なり

爾が熱心に書きつゝあるの時爾の心のうちに種々の忘念の萌さざるは汝は如來の行を行じつゝあるが故なり

爾が誠實に論じつゝあるの時爾の心のうちに種々の邪念の起らざるは爾が如來の行を行じつゝあるが故なり

忠實に働き熱心に耕し誠實に紡ぎつゝある人々の心のうちには希望の光くまなくみちみちて煩惱忘念の雲起らず心身常に安らかなり。これ忠實に働き熱心に耕し誠實に紡ぐことが即ち如來の不行を行じつゝあるが爲めなり。昔ある婦人カーライルに書を送り己が人生の問題に悩める旨を記しその教を乞ひたりし時カーライルその婦人に返事すらく由なき事企て給ひそ御身が針箱の裡には亂れし糸はあらざるか。あらば之を整理して糸巻におさめよ御身が筆筒の裡には取り亂されたる衣服はあらざるか。あらば美はしく之を片就け給へ。若し御身かくあし給はば煩ひ給ふ人生の問題も何時となく雲霧の如く跡なく消えぬべしと。これ誠に意味深き語にあらすや味ふべき教にあらすや。

人々よ既に爾がなすべきの行は如來によつて與へられつゝあり自ら思ひ煩ふことなけれ爾等自ら何の爲めに何をなしつゝあるかを自覺して自らなさるべからずと感ずる所の事は即ちこれ爾がなさるべからざる爾等のつとめなり。爾が今日なしつゝある所の事は必ずしも爾が豫め撰定せしものにあらざるべし。然らば爾がなしつゝある所のことは如來が爾をしてかくなさしめつゝありと考へよ。然らばその功果の多少成功の有無事業の大小等に就ては決して思ひ計ふことなけれ唯忠實に熱心に誠實に己がなしつゝある所のつとめをなせ己がなしつゝある所の事業に安んせよ。

八。真理の證明は真理に在り

光の光たるを知らむと欲せば唯光に向へ暗に往くこと勿れ。天の天たるを知らむと思はば唯天を觀よ。地に尋ねざれ樵夫の熟否は漁翁に問ふて知るを得す。俗人の技能は相撲取によりて確めらるゝ能はざる

也

宗教のこと亦此の如し。若し我友如來の大道の果して真理なるや否やを確めんと欲せば、唯如來の大道に向へ、學問により、倫理により、其他大道以外一切の事象などによりて之を確めむと努むべからず、努むる必すしも不可なるに非ず、唯其竟に無効なるを思へは也。

光の光たる證明は唯光にあり、天の天たる證明は唯天に在り、樵夫の熟否、伶人の能否は、樵夫と伶人によりて檢すべし。如來本願の大道に關する一切の證明は、悉く大道其物の中より與へらるべき也。即ち眞實に如來の大道を實證するのみによりて、始めて其眞理なるを觀得すべき也。

九。大小強弱

我等は小なるが故に、如來の大靈我等に降り、我等此の大靈を感ず

る時、心遠く、恢廓曠蕩の天に逍遙して、一切の繫縛復た我を累さるるを覺ゆ。故に我等は小なるが故に、大なるを得る也。されば我等の小なるは、毫も憾むべきにあらざる也。

我等は弱きが故に、如來靈能の御手、我等を助けたまふ。我等此御手に憑る時、猛然として罪惡の重圍を破り、笑つて一切の魔軍に進み得るの勇氣を感ず。故に我等は弱きが故に、強きを得る也。されば我等は弱きが故に、些たも悲しとするに足らざる也。

是を以て、我等は寧ろ我が小なるを謝せむ。寧ろ我が弱きを喜はむ。既に之を謝し、之を喜ぶ。又何ぞ自己の濁れるに泣き、自己の卑しきを嘆かむ。我等濁ればこそ、如來は其御名の溝を通して、清麗玉の如き泉を我等が淤泥の如き胸の中に灌ぎたまふにあらすや。我等卑しければこそ、如來は其與ふる信仰によりて、尊嚴なる靈徳を我胸に降し、我等心靈を其莊嚴したまへる靈臺に上らしめたまふにあらすや。されば我等濁れ

るが故に清らかなるを得、卑しき故に尊くせらるゝを得、之を感じ來りて、我等は我弱小卑汚なるの管に我不幸たらざるのみならず却て此中に深遠なる大悲の提撕を認め來るを得べきにあらずや。

一〇。教室の宗教

教育者若し自ら教育者たるの故を以て是非とも自己の感化を學生に注かざるべからずとあらば、疲勞徒らに自己と學生との上に加はる外何等の効果あらざらむ何となればあせる時りきむ心あり細工する心あり而して人心の感化は決して屑々たるりきみ心と細工心との能く爲し得る所に非れば也。

されは教育者は唯爾が任務を念じて其奉行をつとめよ而して其結果たる感化を貪ること勿れ自己の使命が單に道を講じ學を明にする

あるを思ふて之を奉じ之を行ひ而して之が爲めに來る感化の如何は措いて求めざれば結果は與へらるべき所には求めずとも與へらるべく與へらるべからざる所には求むとも與へらるべからず凡て是れ我等の計ふべき所にあらざる也。
講壇は是れ講師が如來より受けたる聖職を實現すべき神聖の靈臺也。教室は是れ教育者が如來より蒙れる使命を果遂すべき尊嚴の聖界也。決して賤しき清からざる人間の計へる所謂感化及薰陶を施すべきの地に非る也。

一一。宗教界の罪惡

宗教界は必ずしも清淨の梵園にあらず却て是れ惡人の集合也其故は宗教界にある者は悉く自己の罪惡に悶へつゝある者のみなればな

り。若し我等にして、自ら罪惡の身なりと思はず、又其爲めに苦めらるゝ
 ことなくは、我等何の爲めにか宗教の門に走らむ。されど我等に罪惡あ
 り、必ずしも法律我を罰し來るに非らず、倫理我を責め來るにあらぬも、
 自ら我内心を觀る時、猛然として其中に狂ひ荒るゝ罪惡の怒濤を感じ
 ては、自ら平然として晏坐するを得ず、而も起つて四方を望むに、茫々た
 る大千界、無明の暗黒深く鎖して何處にも己れを寄するの地なきに惱
 むどき、暗中聲あり、我を招いて限りなき光明の慈懷に我を攝めむと呼
 びたまふ。我等如何ぞ之に馳せざるを得むや。かくて集り來れる同朋の
 寄合、即ち是れ宗教界也。

されば茲に盜賊あり、掏摸あり、姦淫者あり、詐僞者あり、賭博者あり、殺
 人者あり、國事犯あり、又此の如き罪名を負はずして、而も其實、此等の罪
 名を負ふ者よりも數層重罪の惡人あり、而して此等の極惡深重の惡人、
 皆此宗教の隱處に集ひて、至眞至聖の感化に各其の生命を獲得し、恰も

此世の囚徒が同じ赤衣に身を纏ふが如く、共に同一恩寵の光明の衣に
 包まれ、づい長へに無限大悲の春光に浴びつゝいある也。

而も我等の罪惡や餘りに大也。されば身、此宗教の感化を受くるに到
 るも、直に完全なる廓清を我心靈の上に見ること能はず。之がために猶
 ほ時として大悲の矜哀を顧みず、罪惡の舊習を繼かむとする也。是れ正
 に宗教の教徒が現在の眞状態也。されば教外の我友、爾宗教に入るに當
 つて決して教徒を以て純潔正大の士人也と信ずること勿れ。此處は皆
 是れ惡人の集合也。茲に蛇の子あり、蝮の裔あり、孔雀の羽もて飾れる鳥
 あり、羊の皮を被れる狼あり。されば爾決して教徒を信せざれ。唯大悲の
 如來を信せよ。若し爾教徒の語る所に尊ぶべきの語を聽かば、爾は之を
 以て教徒の語と認めず、彼等の口を通じて語りたまへる如來の語也と
 認めて之を奉せよ。若し爾教徒の行ふ所に敬ふべきの行を見れば、爾は之
 を以て教徒の行と認めず、偏に彼等を通じて現はれたまへる如來の行

也。と認め、之を敬せよ。敬すべく奉ずべきは教徒にあらず。唯如來也。如來の外に誠なる者なく善なる者なし。爾唯此如來に之いて其降したまふ平安を受け、其與へたまふ感化を蒙るべき也。然らずば、爾折角宗教の門に入るも、常に教徒の罪惡によりて、其心靈上の進路を阻礙せらるゝが如く感じて、常に動搖を混亂との苦惱に沈まむ。

一友あり、曾て基督教會に在り、偶々不時の災禍に罹りて非運の境に沈むや、今迄懺悔を装ひし牧師及び信徒が、悉く己を棄て、顧みざりしを憤りて、終に教會を脱しぬ。我等之を聞いて、深き感あり、乃ち茲に之をいふ。

一一。信仰の冷熱

我が如來を喜ぶの情は、時に高潮に達して熱涙の溢るゝ如き事あり

されど時には、大に冷却して、如來の慈悲は一枚の煎餅よりもありがたからざる事あり。我之を思ふ毎に慚愧に堪えざる也。かゝる冷熱常なき信念を有する我は、慈悲の御親の常に照護し給ふと思ふ毎に冷汗の背を濡すを覺ゆ。然り而してこの慚愧心すら時に冷熱ある也。淺ましき我等なるかな。

我深き罪惡の痛手を負ひし後に、我か信念は熱するなり。我が信念熱する時、我は涙を以て、血を以て、その徳を讃めんとす。されどこの熱情は長く續かざるなり。多年の經驗によれば、この熱情は一時間なる事あり。一日なることあり、一月なることあり、一年なることあり、而して其一時機の間、に於てすら、冷熱の交々來るは避くべからざる也。

人はかゝる状態にある。我等の信念を以て、不確固なりと笑はん、或は又時に熱するを見、時に冷なるを見るの友は、我等の信念の存在を疑はむ。かく笑はるゝ、かく疑はるゝ、總ての罪は我等にあり、耻しきは我等な

るかな。

我等はかゝる冷熱常なき信念の状態にありなから、常に失望なく、落
 膽なくして、一道の光明をたどりて、進み來り、進みつゝあるを知覺する
 は喜はしき事なり、而してそのかくの如くなる事を得るは偏に大悲の
 御手の導き給ふが致す所と喜ばざるを得ざる也。我等に若し誇るべき
 ものありとせば、其信念の確固にあらずして、その信念を守り給へる慈
 父の御力にあらずかな。

一三。南枝の梅花

庭前の梅花北枝未だ蕾は堅きに、南枝既に綻び初めけり。是れ何のさ
 ゝやきぞや。

日光はうららかなるかな、日光はあたいかなるかな、日光は貴きかな

日光は方なるかな、日光は生命なるかな、日光の照るところ花早く開き
 日光の隔るところ花開くに後る。是れ何のさゝやきぞや。

我等の精神に昌平と歡喜の花開くるは、之をして然せしむるものな
 く、て止まんや、如來の光明はうらゝかなるかな、如來の光明はあたいか
 なるかな、如來の光明は貴きかな、如來の光明は力なるかな、如來の光明
 は生命なるかな、如來の光明の照らすところ、昌平の天地開かれ、如來の
 光明の到るところ、歡喜の芳香は散せむ。

友よ、見すや、南枝の梅花はこれ如來の啓示にあらずや、南枝の梅花の
 上に如來攝取の光明を拜するものは幸なるかな。

一四。英靈底の手脚

昔は雪資禪師云へり、宗教を扶堅せんには、須く英靈底の漢なるべし。

人を殺して眼眨かざる底の手脚あり方に立地に成佛すべしと之なるかな、之なるかな人を殺して眼眨かざる底の手脚之ありて初めて宗教あるべく、之ありて初めて天下を謀るべき也

我等如來の他力を説く時人あり、汝の云ふ如くんば社會の進歩は止まんどすと云ふ、又人あり、汝の云ふ如くんば國家は夫れ亡滅せんとすと云ふ、又人あり、汝の云ふ如くんば財產と生命とを危うせんとすと云ふ、而して我等は常に答へて云ふ、如來の他方に頼ることによりて社會若し進歩せざる亦可ならずや、如來の他方に頼る事によりて國家若し亡滅せば亡滅する亦可ならずや、如來の他方に頼る事によりて財產と生命とを危うする事ありとせば、夫を危うする亦善からずや。

人を殺し國を滅し、而かも眼眨がず手脚震はざる底の決意ある者に非んは如何ぞ能く爲すべき人を殺すは常人の以て難しとするところ、國を滅するは凡人の以て惡とするところ、されど達人は敢て之を爲す

而して之を敢てするの決意は精神の基礎を人生以上に置く者也、この精神の基礎ありて天下を語るべく、國家を受くべく、群生を荷負すべき也。

我等は社會平和の基礎は如來の大心に置かるべしと信する者也、我等は眞正の國家は如來の信心に依りて動くべしと信する者なり、我等は人間最上の福祉は如來の施與し給ふ所なりと信する者也、故に我等が如來の大法を信じ、之を宣傳するの前に、横はれる惡社會、惡國家、惡人種の滅亡はものとせざる也、如來の信心を信するが爲めに滅する社會をして滅せしめよ、如來の慈心を信するが爲めに亡ぼる國家をして滅せしめよ、如來の慈心を信する爲めに死すべき人類をして死せしめよ、我等は既に絶待他力の如來を信する事によりて大なる安慰と平和とを得たり、この平和と安慰とは惡社會、惡國家、惡人類の滅亡について聊も乱されざるを喜ぶ也、故に我等は如來より授かりしこの英靈底の手

脚を以て天下の我等に敵する者を救はんと欲する也。

一五。相互の感謝

機織る我姉妹若し梭を抛たは天下の同胞は皆寒さに凍えむされは我姉妹は機に上りて梭を取る時爾が職分の極めて尊きを思ふて今此の尊き職分に與かるを得たる爾か光榮の大なるを感謝せよ而して此大なる光榮を享けたる所以は天下の同胞が爾かために食を與へ爾が爲めに家を建て法律を以て爾を防き道徳を以て爾を護り萬般の經營を以て爾を都合善からしむるがためなるを思ふて謹で同胞の恩恵を感謝することを忘れざれ。

犁取る我老父若し犁を棄てなば此世の萬衆は皆飢に泣かむされば我老父は畑に出で、犁を取る特爾が任務の大なるを思ふて今此の大

なる任務を享くるを得たる爾が仕合せの常並ならざるを感謝せよ而して此常並ならぬ仕合せを辱うせる所以は機織る爾の同胞が爾に衣を與へ犁作る爾の同胞が爾に犁を與へ爾の村人が道を重んじて爾の畑を害せず爾の周圍の人々が凡て爾をして宜しきを得せしむるが爲なるを思ふて厚く萬衆の鴻誼を感謝するに吝なること勿れ。

講堂に教を受くる弟子はその現在の幸福を喜ぶと共に此幸福を得せしめたる爾が先生の恩に感謝せよかく感謝せられる講堂の先生はその天職の神聖なるを思ふてこの神聖なる天聖を果すを得せしめたる爾が弟子の恵みを感謝せよ奴婢は爾の主人に跪くを懶く思ふこと勿れ而して主人は爾の奴婢の勞を謝するを疎かにすること勿れ勞働者は雇主に感謝し雇主は勞働者に感謝せよ部下の役人は上官に感謝し上官は部下の役人に感謝せよ子は父に父は子に感謝せよ弟は兄に兄は弟に感謝せよ妹は姉に姉は妹に感謝せよ妻は夫に夫は妻に感謝

せよ平民は貴族に感謝せよ、貴族は平民に感謝せよ、而して國家の臣民は共に俱に恭しく爾の赤心を捧げて、爾が國君の前に、渠が海岳の聖恩を感謝せよ、而して國君は、爾が臣民の忠實を思ふて、爾が全力を渠等がために盡さむことを忘れされ。

此の如き相互の感謝起つて始めて世に昌泰の光かゝやかむ然らずば永遠の争鬭、長久の軋轢、常に我等が社會を銷さむされば我等は決して今の所謂社會主義若くは平民主義の來るをのみ歡迎すべからず、又今の所謂君主專制主義の出づるをのみ喜ぶべからず、我等若し歡びて社會主義若くは平民主義を迎ふべくば、之と共に又歡びて個人主義若くは貴族主義をも迎へざるべからず、我等若し進みて民主專制主義を採るべくば、之と同時に入進みて民主主義をも採らざるべからず、何人にもあれ、尊嚴を一方にのみ認めて他の恩恵を忘るゝは、是れ佛子の聖冠を與へられたる我等の決してなすべき所にあらざるなり。

されば願はくば我等が國家をして、一に感謝の交換によりて組織せられたる國家たらしめよ、我等が社會をして、偏に相互の報恩によりて成立せる社會たらしめよ、我等は茲に互に煥爛たる無上の光榮を受くるを得べきなり。

一六 貝原益軒曰く

外にあるものは求むれども得がたし、我にある物は求むれば必ず得やすし、聖人其人の心に各生れつきて具足せる道を以て、おしへたまへば、いかにおろかなるしづのをしづのめも、しりやすく行ひやすし。

しりがたきはよく學ばざればなり、行ひがたきは人欲にほださるれば、也是れ道のしりがたく行ひがたき故なり。

人欲にしたがひ、邪曲を行ふは、たとへばやみの夜に、道もなきいばら

からたちの中をわけゆき、みだほりをこえて行くが如し。あやうぐして行きがたし、聖人の道を行ふはたとへば白晝に大道をゆくが如し。明らかにして行ひやすし。

一七。蛤

海底にすみし蛤、たま〜、うつ波風に漂はされて、計らずも、岸邊に浮び出でぬ。

蛤「あゝ、何ぞ、あかるきことや」

漁夫來り拾ふて、之を市場にせる。

蛤「何人か、頻りに、我名を呼ぶ」

賣魚夫、聲高らかに、之を各所に賣りあるく。

、蛤「人、益々我名を稱す。自ら驚く、我名聲、かくまでも噴々たるか」

婢女、呼び止めて、之を求めんとす。賣魚夫、先づ之をすゝむ。

蛤「何とかいふ、近年稀に見る所のものなり」と

婢女、之を鍋に投じ、少しく水を注ぐ。

蛤「恰もよし、我少しく渴せし所なりし」

次で、薪を加ふ。

蛤「よし、水餘りに冷かなりと思ひしに、今また温度加はる」

終りに鹽を投ず。

蛤「あゝ、快きかな、うの味海水の如し」

と、鍋中の蛤、喜悅の餘り、今まで堅くこぢたりし口を開くや、否や、熱湯一時に入りて、即ち死しぬ。

人々、その止まる所を知らずんば、終にその身を失ふに至らむ。

一八。黙想

時は如何に短くとも可なり我等は忙はしき日々の労働の時間よりその若干を割いて之を我等が黙想到に充てむことを要す。

茲に黙想といふは必ずしも結跏趺坐の謂にあらず又獨密室に隠れて祈禱するの謂にもあらずたゞ我等若し歩みつゝあらず坐しつゝある時暫く生平外に馳する思を轉じて内に向はしめよ此時我等は多くの時の間忘れ果て疎濶に打過ぎたる我が本心と相會し相語ることを得む。

其時我等の本心は我等に語るに我等が弱きと濁れるとを以てせむ而して直ちに如來に之いて之を謝し而して此弱くして濁れる我等を救ひたまふ如來の恩徳を感謝し奉るべきを命せむ我等此本心の命に順つて如來を拜し其大靈の前に跪く時我等が胸には平安の泉湧かむ

我等が心に歡喜の光閃かむ而して無上の靈覺と無限の靈氣と自ら我に降り來らむ。

我等は決して我本心に對して無沙汰なるべからず縦し瞬時たりとも之を訪ひ之を見るは我等をして最も安からしめ最も強からしめ又最も正しからしむる唯一の道なり。

一九。春の野、春の山

〔山家集〕を讀みて

ひとりぬる草の枕のうつり香はかきねの梅のほひなりけり

我等獨り悄然として芒々たる大千界の曠野に立てり樂むべき花を尋ね得ず宿るべき家を求めて得ず身疲れ力衰へてやむなく無明の暗の夜に罪惡の草露を冒して其中に束の間の夢を結ふされと暗あまりに凄く露あまりに冷かなりき夢幾度も破れて胸悶うるが上にも悶え

を加ふる時、突爾一陣の清らかなる靈覺の徳香、暗を通じて我上に來る。嗚呼、是れ如何ぞ我自ら起し來れるものならむや、探り見よ、今迄氣づかさりし我頭上に如來大覺の花、今正に盛にほゝるみて、我が探り行くを待ちつゝありしを。

山かつのかた岡かけてしむる庵のさかひにたてる玉の小柳

嗚呼、身は賤しうして、尊き聖賢の行きかふ大道を離れ、獨り罪惡の山中に埋もれたり、我を容るゝ此臭骸の庵を見よ、病と老と死との風雨のため、將に壞れ了らんとするにあらずや、然るに今遇へる大悲の春光は、尊きかなこの汚れたる庵をきはす、深く罪惡の山中に入つて賤しき我を訪ひ、我を包むに此氤氳なる青煙と翠煙とを以てし、我をして知らす。此春光に酔はしめ、終に陶然己を忘れて、全く此春光に化せしむ。我如何ぞ此光榮に胸躍らざるを得むや。

みなそこいふかきみどりの色みえて風になみよる河柳かな

視よ岸上の柳に動ける春色は、今や低く岸下の水底に降れるを知らずや、高く大覺の靈臺動ける法界身の佛の功德は、低く罪惡の淤泥に蝨めける我等か迷倒の心の底に降れるを、事茲に到る流水は、春色と分つべからず、二者皆春なり、迷倒と靈覺と離るべからず、二者全く靈なり。春の野山に入らむ我友、爾は其前に羅列せられたる無量の教訓を、看取せむことを怠ること勿れ。

二〇。岐路に立ちて

右せんか、左せんか、我は今生活の路に迷へり。

路の左右に分るゝ所に立札あり、記して云ふ、左富に行く路、右貧に行く路と。此時我は左せんか、右せんか、富は我が好む所、而して貧亦我敢て辭せざる所、かくて我は生活の路に迷へり。

たちて路を見れば、左は平垣にして、右は峻岨也。此時我は右せんか、左せんか、平垣は我が欲する所、峻岨亦我が厭はざる所、かくて我は生活の路に迷へり。

暫く考うる時に二人左右の路に別れ行く、その人を見るに、左するは利の人也、右するは義の人也。茲に於て、我は決せり、斷乎として右せんかなど。

この時又左右路に別れ行く、その人を見るに、左するは僥倖を望む人也、右するは勇氣ある人也。茲に於て、我は決せり、凜然として右せんかなど。

我は義の人の後を追ひつゝ、今右に向ひて進みつゝあるなり、勇氣ある人の如くにして右に向ひて進みつゝあり、而して我は之を以て自然の樂園に至る唯一の道路也と信する也。

*

*

*

*

*

*

二一。成功の人

繕ふ心ある時、我等は語るに苦む、飾る心ある時、我等は書くに苦む、大に讀書せんと思ひし日は、反りて疲れ易く、大に事を爲さんとせし時は、必ず中途にして止めざるを得ざるに至る。以上は是れ我等が日常經驗する所也。

我等はこの經驗によりて知りぬ。我等はその虚榮の心を去り、目的を案するの志を捨て、ひたすら如來に歸し、如來の大命のまに、くうぶに語らんか、千言立ちころに湧き、ありの儘に書かんか、一言忽ちに文を成さむ、大事を成さんとする者は、始より大事を思はされ、兎も角も、志す所を爲せ、而して爲せ、かくて爲し、爲す内に、大事自ら出來し、終らん、之を如來の御與へと云ふ、かくの如く、榮花の内に昌平の生活を續くるものは、幸なるかな。成功は如來を信する人の肩にかゝれる飾り也。成功を望

むの●人●よ●汝●の●虚●榮●心●を●去●れ●う●ぶ●に●な●れ●無●邪●氣●に●な●れ●徒●ら●に●大●事●を●目●
が●く●る●勿●れ●百●里●を●行●く●に●も●一●步●づ●進●ま●ざ●る●べ●か●ら●ず●一●步●づ●進●ん●
で●止●ま●ざ●れ●ば●終●に●百●里●に●達●し●得●る●と●信●じ●て●安●心●に●一●步●づ●進●む●人●は●
成●功●の●人●な●る●か●な●

一一一。悠久

櫻○花○は○蕾○み○ぬ○咲○き○ぬ○芽○ば○え○ぬ○赤○ら○み○ぬ○散○り○ぬ○朽○ち○ぬ○落○ち○ぬ○腐○り○ぬ○
而○し○て○又○花○は○蕾○み○ぬ○咲○き○ぬ○散○り○ぬ○朽○ち○ぬ○芽○ば○え○ぬ○赤○ら○み○ぬ○落○ち○ぬ○腐○
り○ぬ○か○く○て○天○地○は○悠○久○に○傳○は○ら○む○人○こ○の○境○に○對○し○て○自○己○の○運○命○を○悟○
ら○す○ん○ば○將○た○何○の○時○か○覺○醒○す○べ○き○や○

一一三。道の友

我この頃迷ふことありき自らその迷ひを知りつゝ痛く煩ひ悶えたりき而して自らこの煩悶を去らんにはあまりに弱かりき是に於て我は自己心中の迷悶を道の友に語りぬ覆藏なく心の汚れの底を叩いて道の友に語りぬ

此時我が親愛なる道の友は徐ろに心を訓へ且つ大喝して我が自力執心の淺間しきを語り他力の大道に歸るべきを教ゆかくて我は道の友と怒りを語り怨を明し語ること半日友は殆んど我が人格の低きに驚きし位に心中の卑劣を表白し終れり之と同時に我は友の意見をもきけり而して茲に始めて大悲の光明に接するを得この夜胸中自ら晴れ光風霽月の概ありき過くる二十日の間をやみなく小さき心緒をかき乱せし迷悶の雲霧いつしか晴れこの夜床に入る時には心すが

しうて、念佛自然に口に洩れて、夢始めて安らかなるを得たり。快何ぞ極まらん、喜び何ぞ盡きむ。我はこの經驗に因りて多大の教訓を受け、多大の靈感を得たる喜びを語らざるを得ざる也。

自己の價値を高く買ふこと、客觀的事物をたよりとするこの煩悶の基となるべきこと、又自力の計度を捨て、他力の大道に歸すべきことなどは、我が常に思ふころにして、又語る所なり。然るに、我一度心中に罪の矢を受くる時には、殆んど宗教なき人の如く迷ひかつ悶うるに至るぞ耻かしき。然るに我はこの耻辱を友に表白し得るの勇氣を如來が我に給ひし事を感謝せざる可らず。我自ら迷へる心緒を友に表白せし時、友の一言半句は皆我胸にひしく、こゝろあたる如來の聲也。我はこの時友を通じて如來の聲を聞けり。我にして若しこの友なくんば、何によりてか如來に接するの機を得むや。

親鸞聖人の仰せられける、御同行の語實に故あるかな、又蓮如上人が

屢々集まりて互に信心を語り合へど教へられたるも亦味あるかな。我等か如來の慈光を信じ、歡喜の生活を爲すにも、常に同行と共なることは大なる利益なり。道友と共に道に志すは、確なる道程なり。何となれば、我等一度慈光に接して安心するも、持つて生れし迷悶の雲霧はなかなかに去りかたくして、屢々起り來るものなれば、この時道の友即ち同行のあらんには直ちにその雲霧を友に表白して、その友より如來の聲を聞くの機あるべし。されど若しかゝる時、道友のなかりせば、いかに迷悶の長く續くべきかを思へば、我等は常に、道友と手を引き合ふことの有難きことを思はざる可らず。

總て世の事は、その當事者は惑ひ易きもの也。局外者は判斷を下し易きもの也。故に我等が當事者となりて事物に迷悶する時に之に對して高尚なる地位より判斷を與へらるゝ道友のあらんには、我等はいかに心強きことなるぞや。されば我等は常に我等が直ちにたち歸るべき如

來の御心に接觸せる友を得て互に手をとり合ひ慰め合ひ誠め合ひて進むことは大に必要なることなりとは是れ近來我が經驗より得たる一真理也

二四。雲雀閑話

見よや君我宿は彼の麥浪靜にゆらぐ隴上に在り鼯鼠と相隣す村童屢々來りて我等を窘む而して鼯鼠は曩に終に渠等が嬉戲の犠牲となりぬ飛ぶに翼なき渠は如何にするも地中を去ること能はざればなりされば我に翼あり災厄の一たび襲ひ來るや飄然飛びて青霄の上に入る則ち村童竟に我を捕ふるを得ず平和と太安と常に我に在り我如何ぞ感謝せざらむや

向上の翼を與へられて苦惱の塵寰を脱するを得る者は幸なるかな

二

君よ地中に歩むや我は鼯鼠の速なるに如かずされど渠如何に速に歩めばとて土より土に潜るのみ暗に蠢めくのみ何の羨むべきか之あらむ見よ暗の果は死なり渠は死したるにあらすや

されど我は死せず我に宿習あり時に地上の舊家を慕ふて降ることあるも我が本心の靈覺は我に告ぐるに其危きを以てせり此聲を聞くとや我は直ちに去つて天上に向ふ我が路は潜るに非ず昇るなり地より地に非ずして地より天なり暗より暗に非ずして暗より光なり天に絶滅なく光に衰亡なし我は茲に永遠大靈の恩寵に憇ふを得るなり

君よ地上の力を具ふるを誇らざれ向上の力を得るをつとめよ暗き地上の榮を樂む勿れ明かなる雲表の光を喜べ彼は消ゆべく此は常住なればなり

三

我が遊び回る蒼空は、限りなく大なり、君よ君が地上にて見るが如き
晝夜の別、茲にも有りと思ふ勿れ。そは誤りなり、晝夜は唯地上の事のみ
蒼空は夜あることなし、いかに況んや黄昏あらむや。光茲に常に輝き、晝
茲に絶えず續けり。

君よ、我言を疑ふこと勿れ、我曩に限りなく東に飛びぬ、されど其處に
暗きを見ざりき、我復た限りなく西に翔りぬ、されど其處にも亦光の盡
くるを認めざりき、南に行きて然り、北に行きて亦然り、嗚呼、大なるかな
光明の空、而して我今大靈の力によりて此空を遊ぶを得、我如何ぞ大靈
の威徳をたゝえざるを得むや、如何ぞ我光榮の多大を喜ばざるを得む
や、君よ、我が語ること歌ふこと餘りに多きを異しむ勿れ、我は我舌のあ
らむ限り、否我あらむきはみ、語らざるを得ず、歌はざるを得ざるなり。

四

君よ、我蒼空は、我に感謝を強むす、我光明の大靈は、我に讃頌を求めず。

されど我彼の恩寵を思ふ時、語らざるを得ずして、語り歌はざるを得ず
して、歌ふ此時如何ぞ我に我聲の朗なるを誇り、我歌の美なるを求むる
の思あらむや。

されど奇しきかな、君よ、我曩に隴上に降りし時、其處を過ぎける農翁
は、其孫と共に、如何に此頃彼の雲間にきこゆる雲雀の歌の美はしくし
て、尊げなるよと語りつゝ、行けり、君よ、我聲は尊きものにあらず、我聲は
耳にだに入るに足らざる者なり、我は歌うたふを習へる者にあらず、如
何ぞ美はしく歌ふを得る者ならむや、されど今我歌美はしといはれ、我
聲尊しとほめらる、嗚呼、君よ、我歌は是れ我歌にあらざるなり、單に我唇
を通じ、我舌によりて響きたまへる大靈の御歌のみ、大靈の御聲のみ、宜
なり、この歌の我より出づる時、聲は高からざれど、而も大空なべて之が
爲めに震ひ、歌は調必すしも長からねど、而もたえなる神韻の之がため
に、大千に流るゝが如く感じて、我さへ自ら其尊きに涙ぐまるゝことあ

るや。

三

君よ、君も亦我と同じき身の上とならむと望みたまふか。さらば君よ先づ向上の翼を養へ。徒らに梯を君の外に求めたまはざれ。綱を君の外に探り給ふこと勿れ。君に唯向上の翼さへあらば、梯なくも君は光明の空に入るを得べし。綱なくもたやすく無窮なる自由の天に攀つるを得べし。向上の翼こそ、是れ單に自由、大安、清淨、尊嚴の源なり。

嗚呼、彼の青雲の一方に紫の雲たなびけり。草緑なる野邊の上に、堇の花咲けるに似たらずや。而して彼の斑々たる白雲は、小羊の其邊に徜徉するに髣髴たらずや。いでや我れ彼處に行つて、我歌につれて彼等を舞はしめ、共に俱に復た大靈の威徳を讃揚せむ。さらば君、幸たえす君に在れ。

二五。活路は開かれたり

塞かれたるを塞かれたりとせよ、閉ぢられたるを閉ぢられたりとせよ、徒らにその閉塞したる方面を望み見て、失望する勿れ、落膽する勿れ、煩悶する勿れ、阻喪する勿れ、而して他の方面に眼光を注げよ、そこに活路は開かれむ。若夫れそこにも活路なくんば、又他の方面を見よ。そこにも活路なくんば、又他の方面を見よ。かくて我等は終には開かれたる活路に出づるを得る也。一度活路を得んか。我等は希望は満たさるべく、勇氣を得べく、平和を得べく、自由を感じるや必せり。

貧者は、その金銭の點のみを以て四方を見れば、世は或は閉塞したりと感せられむ。されど一度眼光を他に轉する時は、大なる天地の貧者のみの爲めに開かれたるを悟るに至らむ。

愚者は、その智識の點のみを以て四方を見れば、世は或は閉塞したり

と感せられむ。されど一度眼光を他に轉する時は大なる天地の愚者のみの爲めに開かれたるを悟るに至らむ。

病者は其健康と云ふ方面より見れば、世は或は閉塞したるが如く感せられむ。されど一度眼光を他に轉する時は、大なる天地の病者のみの爲めに開かれたるを悟るに至らむ。

古語に「窮すれば極まる、極まれば通ず」と云ふ事あり、これ閉塞したる天地にありて、開かれたる別天地を發見する事を意味す。我は恒にこの窮すれば極り極れば通ずと云ふ事を思はざるべからず。窮は單なる窮にあらずして、如來が我等を導くの警覺なりと知らば、我等はこの窮によりて大に達せざるべからず。我等は如來の寵兒なり、如來は總てを統理して、我等の宜しきを計らひ給ふ。されば我等の天地は常に閉塞すべからず。故に我等は常に窮すべきの用を見ざるなり。夫れ然り而して尙ほ事實の上に於て我等は、時に天地の閉塞したるを思ひて、困窮し、落膽

し、煩悶する事なきにあらず。その然る所以は、我等が如來の大道を忘れたるが爲のみ。我等が如來の大道を逸する時にこの困窮を得、煩悶を得、失望を得る也。されど一度如來の大道にたち歸らんか、忽ちに活路は開かれ、繁縛は脱せられ、希望は與へられ、慰藉は感せらるゝ也。

人生の行路を行く内に、我等が行かんと欲して行く能はざる事あり。此時に我等は嘆して云ふ、道は閉塞せり、世は我等が爲めに冷酷也。されど能く思ひめぐらせば、これ我等の淺墓なる也。小兒が溺るゝを知らずして、池の薄氷の上を行かんとするとき、之を止むるはこれ親の慈悲ならずや。されど小兒はその自己の意志の閉塞せられたるを悲みもがくは我等の常に目撃するところ、而してこの小兒の愚は、世の閉塞を嘆する我等の愚を表示したるにあらざらんや。故に我等絶待の慈悲の如來を信する身は、常に開かれたる活路を發見して、世の閉塞を嘆すべからず。

我等が行くべからざる所に行かんと欲する時如來は大なる御手を以て其路を塞ぎ給はむ我等が求むべからざるを求むる時如來は強き御足を以て其路を閉ぢ給はむ然るに我等は如來のこの御心を知らずして徒らに嘆じて云ふ世は閉塞せりと愚なるかな我等の心や如來はかくして慈悲を以て我等に悪しき路を塞ぎ給ふと同時に我等の正に應に進むべき大道を他の方面に開いて我等に活氣を與へ希望を惠み給ふ大なるかな如來の御心や

我等の目的の蹉跌する時我等は失望すべからず進路は閉塞したりと嘆すべからずこゝに活路は開かれたりと思へ而して其活路を發見せんと思へ而して發見せられたる活路に猛進せよ我等の事業の失敗に終りし時我等は世は閉塞せりと嘆すべからず萬事窮すと失望すべからずこゝに活路は開かれたりと思へ而して其活路を發見せんと思へ而して其發見せられたる活路に前進せよ

我等の經驗する所によるに我等が或一方面を以て閉塞爲すなきを嘆じつゝある間に早や他の一方面には大なる活路の開かれつゝある也而して我等はこの活路の開かれあるに氣付かて徒らに閉塞の方面のみ見て不平と嘆息とに日を送る事ありこれ愚の甚しき事にあらずや我等をして嘆息なからしめよ我等をして失望なからしめよ我等をして悔恨なからしめよ我等はかゝる爲して益なき事の爲めにあたら一日を送るより即ち閉塞したる路の閉塞に不平にして時を過さんより如かずこゝに如來に接し如來が特に開き給ひし活路に行きて希望と満足とを得來らんには

友よ障子を出でんとして紙に飛つきつゝある蜂を見すや彼は自己が向ひつゝある障子のみを氣を取られ後方に彼の飛び去るに餘ある大道の開かれたるを知らずして營々苦悶して紙を破り出でんとす而して彼は終に疲れて障子の骨に死し去る也友よ我等はこの蜂を鑑み

てよかるべき也我等はこの蜂の愚を憐むと同時に後方に開かれたる
大道に進まざるべからず。

友よ我等は不平を云ふまじ嘆息もすまじ常に如來の慈光に觸れて
開かれたる活路を行かんわゝ行かん開かれたる大道こゝに花匂へり
こゝに鳥歌ふわゝ行かん如來慰籍の手の導く儘に。

* * * * *

二六。明朝

友よ若し我心他に對して平かならざる時あらば直ちに筆を執りて
己が思ふ儘を記せよその思ふことに於て些かも慮ること勿れその記
することに就て少しだも憚ること勿れ爾若し慮りなく憚りなく之を
記し終らば一先づ之を手近き所の匣中に納め置くべし。

かくて爾明朝ねむりより起き手洗ひ口嗽きなば先づ昨日記せし所

のものを匣底よりとり出して靜かに之を讀むべし爾は我がいかなる
ものなるかはこれによりて最も明かに自覺するを得べし何となれば、
爾はかくなすの時最も明確に如來の光明によりて自己を讀むことを
得ればなり。

友よ若し我心他に對して不快を感じるの事あらば直ちに筆を執り
て書を認むはよしされど今その認めし所のものを直ちに郵送するこ
と勿れ爾認め終らば必ず封せずして一夜之を爾の机上に置くべしそ
の封せざるは如來の點檢を得んが爲めなり。

かくて爾夜明けなば昨日認めし所の書を郵送するに先ちて必ず先
づ之を一讀せよ何となればかくなすの時爾はその書の發すべきもの
か發すべからざるものなるかは如來の點檢によりて最も明白に判す
るを行へければなり。

あゝ明日なるかな明朝なるかな友よ不平あらば明日自己を讀むべ

し不快の時認めし書は明朝之を發すべし人を怒りたくば明日まで俟てよ今日怨みあらば明朝之を發すとせよ人々かくなさばその過失や蓋し少なからむ。

二七。貧及び病

我貧しく何の事業も難ければ國に對して申譯なしなどいふ者あらば是れ大なる誤なり。一簞の食一瓢の飲のみを全財産として陋巷より外に住むと能はさりし顔回は實に貧しかりしに非ずやされども渠は此中に安せり而して其樂を改めさりきかくて外に講義を開けるに非ず著述を公にせるに非ざりしむたゞ此貧裏に安せるがために萬古輝ける大訓を世に遺して之を想ふ者をして颯然たる清風に接するの思あらしむ嗚呼是れ大なる事業にあらずや若し夫れ釋尊か一衣一鉢

樹下石上の生活を送りつゝ天地と共に否天地よりも悠久なる大事因縁を成就したまひしに到つては彼是申すまでもなきこと也されど貧しき我友よ我等希はくば貧しきが爲めに小言を云ふの誤まれるを忘れさらむ貧我等に來りなば我等共に希くは此貧に安せむ世は晒はむ人は罵らむされど我等は我友として近く顔回を有し遠く釋尊を有せるを以て無上の光榮と誇りつゝ此貧に安するの一事を一生の一大事業として成功するに勇む亦可ならずや。
我に病あるがために日々病床に臥せさるべからざるが故に世に對して相濟まさる次第也などいふ者若し有らば是亦大なる迷也法然聖人を見すや渠は病患を得てひとへに之を喜びたまへり蓮如上人を知らすや渠は病中にありて法然聖人の如く之を喜ぶこと能はさるがために自ら自己のあさましく耻づべきを悲みつゝ翻つて此あさましく耻づべき自己を今救ひとりたまふ大悲救濟の慈悲を感謝せり事や

極めて瑣細なるが如しと雖も、此二者相並んで、我等がために示したまふ教訓、如何ばかり大なるぞや、我等病にありて、之をきくとき、茲に力を得、慰を得、樂みを得、救を得る也、さらば此事、豈に是れ宏大なる事業にあらずや、二師の生涯は、始より終まで、煥爛なる光彩を有せるに満てり、されど此の事業を抹殺し去れ、而も唯此病中平安の一事、猶以て二師をして、同様の光彩を有せしむるを得る也、病める我友よ、我等希くは病めるが爲めに、愚痴をこぼすの迷謬なるを忘れざらむ、病我等に來りなば、我等希くは共に此病に安せむ、世は嘲らむ、知らぬ者は罵らむ、されど我等は法然、蓮如の二聖を我味方として有するを喜び、つゝ其後を追ふて、唯此病中に悶えざるの一事を、一生の事業として成さむことを努めむ、是れ實に我をして法然、聖人と同じからしむる事業也、我之を成し了らば、我は蓮如、聖人と同じき光彩を有するを得べき也、貧ならば、希くは貧に安せむ、病あらば、希くは病に安せむ、彼の臺閣政堂に於ける争の事業よ、

り、此は如何ばかりか、神聖に又如何ばかりか、高上なる事業たるを知らずや。

二八。知られざりし同情

人生の旅路に善く通せる者は、何人も我が思ひも寄らざりし社會の方面に、我が思ひも寄らざりし朋友の存せるに心づくこと、度々あるべし。此朋友は、よのつねの朋友の如く、未だ我と相見しことあらず、我と相語りしことあらずして、人生の行旅に關して、共に行かむ、互に助けんなど、相約せしことは、更になし、我は毫も彼を知らざりしなり、而も彼は、我を知れり、或は我が語れる語を聞き、或は我が草せる文を読み、又は他の方面より、我が性格及び主張を聞知して、殆ど我と道を同じうし、我と歩を同じうし、來りし也、豈にそれのみならず、彼は我が知らざりし其間

に、我が爲めに勞し、我が爲めに盡し、さまざまの方面より我を助け來りし也。而して是れ單に少時の間に非ず、二年三年、長きは數十年の以前より此篤厚なる同情を我に濺ぎ來りし也。我等は思ふ世の凡ての人は、此必種の朋友を有せり、されど名を世に顯はすこと廣き者は、其廣きほど多く、此種の朋友を有せり、されど之を知らざる間は、我が聲名及び地位は、すべて是れ自ら作りしもの、如く思はるれど、能く思ひ來れば、殆ど其多くは是れ此未知の朋友の助成によれり、若し之をさくらで獨り驕慢の思に上る者あらば、是れ全く處世上の近眼に陥れる者也。

されば我等は、常に此未知の朋友の恩誼を感謝せざるべからず。已知の朋友が常に我を助け、我を導きつゝあるを思ふと共に、又未知の朋友が等しく我を助け、我を導きつゝあるを忘るべからず。我一身及び事業が一分、我が知れる朋友によりて支へられつゝあると同時に、又其一分が實に我が未だ其面さへ名前さへも知らざる其等の朋友により支へ

られつゝあるを忘るべからず。而して一時の不和によりて、我が知れる朋友が悉く我を見離し、我を見すつることありとも、是れ實は我朋友の一分が我を見離し、我を見すてたるに過ぎずして、我には猶未だ一分の朋友が我を愛し、我を助けつゝあるべきを忘るべからず。かく思ひ進むに及んで、我等は我一身に加はれる同情及恩誼の範圍が始めて廣大なるに、驚かざるを得ざる也。而して我等は自ら驕慢の思に高まることあらざらむ。且つ失望の淵に沈むこと亦決してあらざるべき也。

されば我友よ、可知と不可知との二者も、此宇宙は成れりと云ふ學說に似たる見解は、我等が生活上にも起るべき也。我等が生活は、まことに已知と未知との二層の恩誼に包まれて成されつゝある也。而して諸君、已知の恩誼の深重なる殆ど我等の計るべからざるものあり、而も未知の恩誼は、猶これより幾層倍深重なるかを知らざるべからざる也。されば我等は進んで此未知の恩誼を知了して、已知の恩誼として感謝するに

到らざるべからず彼の學者は永久不可知の本體は其思想を向くる能
 はすと抑制せらるれど我等が蒙れる未知の恩誼を知了するについで
 何等の制限なし此未知の恩誼を知了する是れ實に我等が人生の職務
 なりこの職務を進むること多きに隨ひて我等は益我が蒙れる恩寵の
 大なるを知らむ而して終に我全宇宙が悉く是れ我に對する大恩寵の
 一團たるに外ならざるを覺了して下は我が脚下の一塵より上は彼の
 浩々たる蒼穹の果ての其果てまでたゞ我がための大恩寵の潮流
 が洋々として流れわたれるをささるに到らむ大道の極致は正に是に
 ある也

二九。他力の救濟

われ他力の救濟を念ずるときは我が世に屬するの道開け

われ他力の救濟を忘るゝときは我が世に處するの道閉つ。
 われ他力の救濟を念ずるときはわれ物欲の爲に迷はさるゝこと少
 し。われ他力の救濟を忘るゝときはわれ物欲の爲に迷はさるゝこと多
 し。われ他力の救濟を念ずるときは我が處するところの光明輝き、
 われ他力の救濟を忘るゝときは我が處するところに黒闇覆ふ。
 嗚呼他力の救濟の念は能く我等をして迷倒苦悶の娑婆を脱して悟道
 安樂の淨土に入らしむ我は實に此念によりて救濟されつゝあり若し
 世に他力の救濟の教なかりせば我は終に迷亂と悶絶とを免がれざりし
 ならん然るに今や濁浪滔々の闇黒世裡にありて夙に清風掃々の光明
 界に遊ぶを得るもの豈區々たる感謝嘆美の及ふ所ならんや。

三〇。不可解

蜆の殻を以て大洋の水をくみ盡すを得ることあるも我等の智識を以て宇宙の至靈を解釋する能はず。

小なる人間の智識を以て大なる宇宙の至靈を計度せんとす終に不可解なり。

鍋の蓋を以て大海を覆はんとする者愚ならば人間の凡智を以て宇宙の靈體を知らんとするは賢き事にはあらず。

靈は靈によりてのみ解すべし。如來の智によりてのみ見るへし。

不可解を不可解とせよ、こゝに明白に不可解の靈を認めむ。この靈を信するときは宇宙の意義既に解せられたるはんぬ。

故に先聖は云へり、自力をすて他力の本願に皈せよと。

* * *

三一。藥也

然り我等の宗教は藥也。故に心に汚れなき人は之を要せず。心に疾なきものは之を要せず。

然り我等の宗教は病的也。故に心の健全なる人は之を要せず。心に缺陷なき人は之を要せず。

我等の心は汚れたり。故に我等の宗教あり。我等の心は疾めり。故に我等の宗教あり。我等の心は不健全也。缺陷あり。故に我等は我等の精神主義の藥餌のあるにあらず。んは一日も生活する能はさるなり。

されは我等は心汚れし人と共に、疾める人と共に、不健全なる人と共に、怯弱なる人と共に、如來か付與し給へる藥を服用して平和を得んと欲す。故に自ら心の清きを信する人、自ら健全を信する人は、我等の友にあらず。我等の宗教を味ふ能はず、又味ふの用なき也。

而して我等の心の疾は時々刻々に起り来る也。故に我等は一刻も如
來大道の薬を離るゝ能はざるなり。

三三。那先比丘曰く

「誠心は人に疑を解く、佛ありと信せよ、經法を信せよ、比丘僧ありと信
せよ、羅漢道ありと信せよ、今世ありと信せよ、後世ありと信せよ、父母に
信孝せよ、善を爲して善を得と信せよ、惡を爲して惡を得と信せよ。
信ありかくて心便ち清淨にして五惡を去らん、何等をか五とする。一
には姪姪、二には瞋怒、三には嗜臥、四には歌樂、五には疑人、この五惡を去
らずんば心意定らず。この五惡を去らば心便ち清淨なり。」
「人誠心の心あり、自ら安慰を得べし、世人自ら能く制止して五欲を止
め却けよ、人自ら身の苦腦を知れば、よく自ら安慰を得む。人皆智惠を以

て其道德を成就する也」

三三。舊知己

友と相遇ふて道を語る、此事や餘り大したることにも非るが如しと
雖もよく思ひ見れば、茲に永遠の因縁あり。

友と遇ふ時、此友は如何なる事情によりて我に來りしや、我は又如何
なる事情によりて此友に會はざるべからざるに到りしやを考へ見よ
而して此事情一たび明かにせられなば、又進みて其事情が如何の原因
によりて起り來れるかを想ひ見よ、我等はかく進みて終に此原因、此事
情が全く我より外なる、我より上なる、大靈の中より流れ來りしことに
心つかん、即ち今日唯今、此處に於いて、此友と此事を語るに到りし事は
全く是れ永遠の昔より、此無上尊嚴の大靈によりて結ばれたりし渠と

我○の○間○の○深○重○なる○因○縁○の○計○ひ○に○よ○る○も○の○た○る○を○覺○ら○む○之○を○覺○る○時
 我○等○は○初○め○て○會○へ○る○新○朋○友○の○上○に○過○去○永○劫○以○來○の○舊○知○己○を○認○め○す○ん
 ば○あ○ら○ず○是○に○於○て○明○か○に○い○へ○ば○我○等○に○は○實○は○新○朋○友○と○い○ふ○も○の○な○き
 な○り○此○頃○よ○り○の○交○際○ど○い○ふ○も○の○な○き○な○り○朋○友○は○皆○是○舊○朋○友○也○會○ふ○者
 は○悉○く○是○久○遠○劫○來○厚○き○交○誼○を○結○び○た○る○者○也○我○等○是○を○感○じ○來○り○て○尊○嚴
 に○し○て○然○も○融○然○た○る○一○種○微○妙○の○興○趣○を○感○せ○ざ○る○を○得○ず○隨○つ○て○縱○ひ○微
 な○が○ら○も○放○漫○疎○懶○以○て○此○尊○き○因○縁○を○無○に○せ○ん○と○す○る○の○極○め○て○恐○多○き
 こ○と○た○る○を○自○ら○認○め○ざ○る○能○は○ざ○る○也○

昔者、智顛、光州の大蘇山に上りて慧思を拜せしや、思曰く、昔日靈山に
 同じく法華を聽きぬ、宿縁の追ふ所、今復た來ると。日蓮、川奈の漁夫彌三
 郎に書を贈りていふ、日蓮去る五月十二日流罪の時、其津につきて候ひ
 しは未だ名をも聽及びまらせず候處、船より上り苦しみ候ひき處に
 慙にあたらせ給ひ候ひしこと如何なる宿習ならん、過去に『法華經』の行

者にて渡らせ給へるが今末法に船守の彌三郎と生れかはりて日蓮を
 愍み給ふ歟、殊に五月の頃なれば、米も乏しかるらん、日蓮を内々にて
 はぐみ給ひしことは日蓮が父母の伊豆の伊東川奈と云ふ所に生れ
 かはり給ふかと見よ、先賢の感ずる所、共に其調を同じうするを。
 嗚呼、友あり、遠方より來る、亦樂しからずや、共に遠き古き如來大靈の
 御許に結ばれたる同明、今復た如來によりて、茲に相遇ふ、何の樂か、之に
 如かん、一樹の蔭、袖の相接する、猶多生の縁たるを喜べば、まして共に衷
 心の奥底を打明けて、共に靈性の秘義を談ひ、互の苦に思ひやり、互の樂
 を頷ちつゝ、共に如來大靈の中に相息ふもの如何ぞ、此厚縁を喜ばざる
 を得んや。

*
*
*
*
*
*

三四。如來を信すれば足れり

我友よ、爾何ぞ悶え苦しむもの多きや、爾が行くべき道は、砥よりも平かに、爾を導くの光は、常に爾を護り、絶えず、爾を照しつゝあるにあらずや。然るに、爾何ぞ徒に煩ひ惱むもの多きや。

しばし待て、我友、爾は餘りに多くのものを負ふにあらずや。卸さずや、爾が右肩の荷物を、右肩の荷物とは善を思ふ心なり、正を思ふの心なり、眞を思ふの心なり、美を思ふの心なり、托せずや、爾が左肩の荷物を、左肩の荷物とは惡を思ふの心なり、邪を思ふの心なり、偽を思ふの心なり、醜を思ふの心なり、善惡邪正眞偽美醜の念、これ實に、爾をして悶え苦しましむるものにあらずや。煩ひ惱ましむるものにあらずや。

たるにあらずや。

患ふること勿れ、重き荷物は決してすてたるにあらず、卸したるなり。卸したるにあらず、托したるなり。卸したるは、力の弱きが爲めなり、托したるは、如來の強きことを信すれば也。

道友よ、我等は唯如來を信すれば足れり。

三五。何等の啓示ぞや

友が贈りし白芍薬の花は清らかなりし。一時は佛前に机上に愛せられし花、今は薪となりて庭の隅に横はる。これ何等の啓示ぞや。

市に買ひし紅蓋薇の花は麗はしかりし。一時は其香に洞を埋み、訪ひたる多くの友よりも賞せられぬ。されどこの花、今は地に委して土と成り行く。これ何等の啓示ぞや。

春早く香りし梅の花はけ高かりき、永しと呼はるゝ梅の花の命もい
つか果てぬ。青葉は出でぬ、梅子は實のりぬ。その後梅子は日々にふと
ぬ。さるほごに、この梅の青葉凋みぬ、梅子皺よりぬ、而して前後して落ち
去りぬ、今は木は將に枯れんとす。これ何等の啓示ぞや。

去年の今頃居を共にせし道友十名の内、今尙依然たるもの四名、二人
は參河に去り、一人は播磨に去り、一人は千葉に去り、而して一人と尤も
年幼き一人とは、今やこの世の人にあらず、之を思ひ之を惟ふ、心凋悵た
らざらんや、あゝ來年の今、誰か此世にあるを期すべけん、人は云無常を
感ずるは氣弱しと、然り我等も爾か知る、知りて尙ほ無常を觀せざるを
得ざる、我心元より弱し、弱しと知れば、ますゝ弱き心起り來る、かくて
我は夢にも泣きぬ、笑ふ者は笑へ、嘲ける者は嘲けれ、我は轉た釋尊の諸
行は無常也、これ生滅の法也の教訓を思ふて止まざるなり。

今は佛前に、かわゆき鴛鴦草の紫白の花品と、ある黃菊の花と供へら

れぬ。机上には紅白の石竹と、姫百合と生けられぬ、何ぞその愛らしきや、
何ぞそのむつまじきや、されどこのむつまじきと、愛らしきとは、果して
いつまでの生命ぞや。

老人の皺ある面を見て、嘗てありし昔の彼か、紅顔の時代を思ひ、少年
を見て、彼がやがて來るべき皺ある面を思ふ、我が性のらちなきや、我は
元より我が心の弱きを知る、されど如何せん、我には多くの物思ふ性あ
り、胡麻色の髪、皺ある顔、あゝこの髪には花をかざせしこともありけん
ものを、あゝこの皺ある顔に幾多の青年の心を溶かせしこともありけん
もの、あゝこの髪、あゝあはれや、今この衰へ、之を思ふて誰か泣かざる房なす、漆
の如き髪、紅そむる花の如き顔、あゝこの黒髪は、やがて白まむ、あゝこの
紅顔や、がてその色を失はむ、之を思ふて誰か泣かざる、そは平凡の事と
いふものは、云へ、我も爾か知る也、知りつゝ、之に泣かざるを得ず、我心何
ぞ弱き。

我は演劇を演劇と知りつゝ泣くもの也、こゝに何等かの教訓なからんや。

かく世を見我を見て我心凋悵たり。我この凋悵の念を思ひて我心忸怩たり。

この弱きわれ若し如來の御力による所なくんはいかて世にあらべき。かくて我は常にかの御親を呼びつゝ日々を送る也。

* * * * *

三六。感謝の辭

我か光明の御父爾は去る六月六日午前第一時俄に爾の子清澤滿之を爾の膝下に召して我等に厳しき警覺を與へ給へり。

如來よ諸行の常なきことは爾が常に到る處に於て我等に教へたまふ大法也。而して爾の子たる渠は其存生の間絶えず爾の御意を承け

て懇に斯大法を我等に教へぬ。恒に曰く生あれば死あり世尊一代の大教一に此に皈す苟も道に志す者安ぞ此簡明の大法に惑ふ可けんやと。而して渠は單に口以て之を教へたるのみならず又其自得を提げて我等に諭せり。常人の所謂不幸渠か一身に蝟集し來れるに當つて渠は唯此大法の自得によりて安らかに進みたり。當時猶ほ我等に語りて曰く予にどりて幸なる今の如きはなしと。示教歴々として現に我等の耳目にあり。然れども我等の迷執猶容易に遣り難きを以て如來爾は此度急に渠を召して新に嚴しき警覺を我等に降したまへり。我等の愚かなる爾の御意を知らざるにあらず。又渠が示教を忘れたるに非ずして而も此警覺に遇ふて今更の如くに驚き又悲しみぬ。されど強きは爾の御力なるかな。愚癡の谷深く落ち行く我等を直に引き上げて高く爾の御意に歸らしめたまへり。留めかねし我等があだなる哀惜の涙を拂はせたまひて我等をして渠が生命の示教によりて此度の警覺の眞趣を覺了

せしめ何となく心明かに又清らかならしめたまへり。そは我等渠が爾の召に應ぜざるを念ふ毎に、自己の亦た今にも知れず渠が後に繼ぐべきを思ひて、胸裏一切の迷悶、灑然として滌却せらるゝあるを感ずればなり。

かくて我等迷悶の暗を去りて、爾に歸る時、我等は渠が死の上に示したまへる爾の矜哀の厚きに感せずんばあらず。而して又進んで渠が四十一一年間の生涯の上に降せる爾の祐護の大なりしを謝したてまつらずんばあらず。篤疾、渠を犯せること十年、渠や決して四方に馳驅し得べきの人に非ざりし也。然るに渠自行の進趣に努むること多年、一旦功名の途を棄て、身を大道に捧げ、専ら宗門の振興に志せしより十數年、内は一宗の綱紀につき、又育英の畫策に就き、外は一般心靈界の向上に關し、殊に他方大道の明白なる發揮について、渠は渠を知れるもの、猶ほ異むばかりの盡瘁を致せり。而して渠が爲には、毫も他人の輕侮と誹謗と

を願みざりき。又幾度となく咯血の累に遇ふて、其病の愈加はり行くを意とせざりき。人或は言ふ、是れ渠が天稟の剛情と我慢とに基くのみと。嗟、剛情か、我慢か、渠も亦もとは罪の子也。其天稟には此等の性分もありしならんか。而も前後四十有一年、殊に後十有餘年の間、渠が如きの病軀を以て自行と化他との上に、渠が如きの盡誠を成し得たる光榮を有する所以、如何ぞ渠が剛情我慢の能くなす所ならんや。全く如來、爾が我等の爲めに渠の上に降したまへる祐護の大なるによらずんばあらず。されば渠が一生短かしといはじ、是れ一に爾が矜哀の生涯也。祐護の歴史也。宏大なる恩寵の傳紀也。我等之を思ひ來りて、單に渠が死に對する哀惜の思の自ら消えゆくのみならず、猶進みて渠をして此光榮を擔はしめたまひし、爾の大慈を感謝し奉らずんばあらず。而して渠自らも亦此感謝にありき。去春渠京都に於いて、宗門經營の議に參し、事了りて將に郷に歸らんとするや、一友に語りて曰く、我が爲すべきは殆ど爲し了れ

り此餘は微力の及ぶ所に非ずされば歸後また故園を出づることなからん卿之を諒せよと而して其死に先だつ少時弟子遺言を問ふ渠曰く無しと嗚呼渠や毫も心残りなかりし也自ら一生の所成に満足して逝ける也我等如何ぞ我を忘れ又渠を忘れて徒に哀惜の涙に咽ふ可けんや

嗚呼如來渠の矜哀は大也渠が生と死とに亘りて渠は斯くまで篤厚の祐護を降したまへり既に斯の如く祐護を渠が既往に降したまへる爾安ぞ渠が現在及將來に亘りて亦此祐護を降したまはらんや思ふに渠や今正しく爾に在らん渠が敬愛せる南歐の古哲人かいへりしか如く渠や決して我等より失はれたるにあらすして正に返されて爾にあり渠が生前に於いて渴望暫くも己まさりし絶對無限の靈臺に坐して其常住不變の妙覺の光に息ひつゝあらん如來よ我等茲に爾に請ふ願くは渠を通して現はしたまへる爾の啓導を既往に於けるか如くま

た現在及び將來に向ひて我等の上に降したまへ渠が生を祐け渠が死を護りて渠によりて懇篤なる警覺を我等が既往に示したまへることく今よりは正に爾の靈に入り全く爾の光に生れたる渠を通して爾の限りなき提撕を示したまへ我等は今迄渠によりて爾に向ふの歩を進めたり向後亦長へに渠を得て爾を離れざらん
盡十方無礙の光明の如來茲に爾の子清澤滿之によりて爾に近ける多くの子伏して爾の御名を稱へて爾の宏大なる矜哀を感謝し奉る南無阿彌陀佛

三七。大安心の境

如來大悲の願心は一刻も息むことなく種々に善巧方便して我等衆生を導かんとす我等この願心に動かされ根本の願意に復する時茲に

如來を拜するを得て、大安心の境に入る。

かくて我等は如來と共に永遠の生命に歸するを得るなり而もこれ如來の力用也。如來の妙不可思議力また高からずや、大ならずや、何物かこれに比せん、何ものか之を記せん。

山鹿素行曰く、天地生々息々、唯々自ら疆めて己まざる也。之を復して、天地の心を見る、終りてまた始まる、終始なき也。其德至大至高にして、天地の情見るべき也。

三八。舊青山

學窓の業終りて故郷に歸れば、舊青山、うれしげに我を迎ふ而して、白髮の慈親、門に倚りて待てり。憂愁の波外には荒れ狂へど、此處には和樂の巖立てり。

人○生○の○こ○と○果○て○光○明○の○本○國○に○登○れ○ば○香○雲○た○え○に○寶○華○麗○し○く○る○み○て○
我○等○を○迎○ふ○而○し○て○永○劫○の○昔○よ○り○我○等○を○待○ち○た○ま○へ○る○如○來○正○に○茲○に○在○
ま○す○煩○惱○の○塵○世○に○は○空○覆○は○ん○ば○か○り○に○漲○れ○ど○此○處○に○の○み○昌○平○の○風○清○
ら○なり○

嗚呼、慈親によらずんば、我等何の時にか安きを得む、況や茲に我師逝き、我友去りて、亦我等の到るをまちつゝあるに於ておや、歸らなん、いさ、魔郷には停まるべからず、頓に他郷を捨て、本國に歸り、父子相見る、豈に是れ世の常の喜ならんや。

三九。無理なき生活

學窓に在る者は、自ら眞實に有せるより以上の學力を、先生に認められたしこの無理なる欲望を有すること勿れ、教室の内外、殊に試験場の

中に於ける種々の苦惱と罪惡とは一に此無理なる欲望あるが爲めなり。

社會に立つ者は位と名と財と形とによりて社會をして自己を買被らしめんとするの無理なる計畫をなすこと勿れ社會に於ける様々の小言と非行とは主に此無理なる計畫あるより起れるものなり。

事をなさんと欲するものは時としては緩歩すべく時としては突貫すべし而も其間に一分だも無理を加ふべからず世に於ける事業の多くの失敗と蹉跌とは亦主として其中に含まれたる無理に因らざるばあらず。

殊に道を修めんとする我等は最も精細に此に心を留めむことを要す。決して自ら己を買被り到底自ら進み得ざるの我が力を以て自ら進まんと無理に企つることなかれ。我等が志は幼き兒が浪打つ濱邊に築く砂の家に似たり。築けば倒れ築けば倒れ同じき無効の歴史を繰り返

せること今迄にそれ幾度そや而も飽くまで之を知りつゝ望なきに望を構へ倒れずしてやむべからざるを強いて倒れざらしめんとす無理の極何ものか之に如かん。修道の上の一切の困厄と煩悶との涙は一に此無理の泉より荒れ來れる也。

知らずや如來の大道は自然の大道なり之によりて成れる斯宇宙は亦是れ自然の宇宙なるを自然の宇宙にあり自然の大道に動かさる而も之を忘れて小やかなる自己の無理をこゝに押通さんとす無理の通りて道理引込むか如く見ゆるはこれ單に一時のこと苦惱と罪惡と破壊と墮落とは竟に其上に降らざるを得ずされは我等希くは自然に進まむ他人か如何に我をまつかはこれ他人のこと我は唯我が真相を打出して赤裸々露堂々以て學校に在らん以て社會に立たむ無理に事業の進歩と成就とを急かす進まざるを得ずして進み退かざるを得ずして退かむ殊に大道の行修に於て我能力の價値を買被ふることなから

此弱きを強きとし劣れるを勝れりとし而して如來の大慈を大慈とし
 にいたいかむかくして無限の平安我に榮ゆ若しそれ爾らすして我等
 受くることなくは永劫の悲つねに我等を襲はむ
 嗚呼無理ならされ一念一刹那常に無理ならされ靜に思を潜めて如
 來の大靈を觀したてまつるとき微かに而も明かに我上に響き來れる
 如來の自然の靈告にすなほに順ひ奉りつゝ其命したまふまに
 退く必すしも我等の避くる所にあらず進退共に如來の天命にかな
 はむことのみ我等の唯一の望也

四〇。我等に退歩なし

世に人生行路の閉塞をなげくものありされど人生は決して行きつ
 まるものにあらず唯爾は如來の天命の下に爾か今日進みつゝある所
 に進みて可也

若し前に進むこと不可なれば如來は必ず爾を右に導き給ふべし然
 らば爾右に進みて可也若し又前に進むも不可右に進むも不可なれば
 如來は必爾を左に導きたまふべし然らば爾左に進みて可なり如何に
 人生の行路閉塞すと雖も爾が進むべき道は必ずや此うちに何れかに
 於て與へらるべし

道友諸兄爾が面の前に位するは爾が前進すべきの啓示にあらずや
 爾が自由に或は左顧し或は右眴し得るは時に右往或は左進し得るの
 啓示にあらずや獨り爾が頭の背面し能はざるはこれ我が如來の天命

が常に爾を以て退歩せしめざることを証するものと知らずや。

四一。千篇一律の徳言

久遠の昔、至高至深の如來、その無相の性より相を示し、無始の體より相を示し、大慈悲相を現して曰く、

苦ある者は來れ、汚れある者は來れ、罪ある者は來れ、迷へる者は來

れ、力なき者は來れ、望なきものは來れ。

我は苦ある者には其苦を脱して樂を與へん、汚れある者には其汚

れを洗ひて清らかならしめん、罪ある者には其罪を滅して徳を與へ

ん、迷へる者には其迷ひを晴して悟を與へん、望なき者には望を與へ

ん、望なき者には望を與へん、我は一切群生の父母たらん、師友たらん

我にたよれ、我にすがれ、我をたのめ、我にまかせ、我は一切群生の爲め

に。肉。も。與。へ。ん。骨。も。與。へ。ん。血。も。與。へ。ん。一。切。群。生。よ。汝。は。唯。我。に。よ。つ。て。
の。み。幸。福。と。自。由。と。の。生。涯。を。得。ん。

十劫の昔、至高至深の如來法藏菩薩と現はれて、六八慈悲の願望を建立して其慈悲の御聲を以て、我等を呼び給へり、其語に曰く、

苦ある者は來れ、汚れある者は來れ、罪ある者は來れ、迷へる者は來れ、力なき者は來れ、望なき者は來れ。

我は苦ある者には其苦を脱して樂を與へん、汚れあるものには其汚れを洗ひて清らかならしめん、罪ある者には其罪を滅して徳を與へん、迷へる者には其迷を晴らして悟を與へん、力なき者には力を與へん、望なき者には望を與へん、我は一切群生の父母たらん、師友たらん、我にたよれ、我にすかれ、我をたのめ、我にまかせ、我は一切群生のために、肉も與へん、骨も與へん、血も與へん、心も與へん、一切群生よ、汝は唯我によつてのみ幸福と自由との生涯を得ん。

三千年の前釋尊は斯の如く説き給へり。夫より七百年の後龍樹九百年の後天親あつてまた斯の如く云へり。梁の曇鸞唐の善導また斯の如く云へり。我日本に來つても源信斯の如く云へり。源空斯の如く云へり。而して我親鸞また斯の如く述へ給ひけり。

我等元より痴愚世を啓發するの方なく、人を誘導するの徳行なく、徒に三毒五欲の奴婢となれる身、昨日も苦しめり、今日も苦しめり、明日もまた苦まん。去年も汚れたりき、今年も汚れたり、明年また汚れにあらん。少にして罪にありき、壯にして罪にあり、老ひてまた罪にあらん。昨の迷へる我は今の迷へる我にして、今の力なき我は後の力なき我たらん。かくて我等は望なき谷より來つて望なき谷を歩み、望なき谷に向ふもの。此憐むべき我等何たる不可思議の因縁そや。人と生れて何たる幸榮そや。我等今生に如來大悲の招喚を聞けり、聞いて暗夜に光明を得たり。歡喜何ぞ極まらん。感謝何ぞ堪えん。昨の時我等此如來の御聲を道友に語れ

り、今正に語り、後にまた語らんとす。

我等元より痴愚、日新の智なく、月歩の行なく、吳下の舊阿蒙は依然として吳下の舊阿蒙たり。故に我等は昨も此阿蒙を慰め給ひし如來の聲に救はれ、今又此如來の御聲にたすけられつゝあり。

あゝ我等凡夫智暗く、行鈍く、今日も悶え、昨日も悶え、其昨日も悶へ、其一日も悶へぬ。此千篇一律の悶へ、此千篇一律の苦しみ、此千篇一律の汚れ、此千篇一律の罪惡、常に如來大悲の千篇一律の徳音によつて慰められ、はげまされ、導かれつゝあるなり。十年以前の如來も慈悲の御親なりき、五年以前の如來も慈悲の御親なりき、今の如來も慈悲の御親なり、絶待無限の慈悲、これ如來常住のすかたなり。此常住不變の慈悲あればこそ、難化の我等幸にもおやみなき五月雨の如き、苦しみに悶へ、汚れの心を慰められて、清淨安穩の光澤に浴するを得たり。

友は我等の語の千篇一律を嘲る、されど我等は我等の語の千篇一律

を喜ぶ我等はかはりやすき心の中にこの千篇一律の德音を得たり。あ
い千篇一律の德音倦みやすき我等變りやすき我等我等か此千篇一律
の德音によつて日に新たなる歡喜と感謝とを得つゝある何たる光榮
そや是れ我等が有する唯一の僞り也。

*

*

*

*

*

*

四一。廻灯笼

さきの日、凱旋門の下に、歡呼して將軍を迎へたる都城の民は、今日其
將軍が遠く絶海の孤島に放たるゝを默視して願みざりき。此種の戯曲は
遠き時と遠き國とのみならず、現前の世、到る處に演せられつゝある也。

人は我をたゝえぬ、而も其唇未だ乾かじと思ふ間に、渠は我を罵つて
顧みず。人は我を賛く、而も其言全く終らぬ間に、渠は我に背いて平然た
り。昨日は我に來つて我を拜し、今後我と共に我道の爲めに盡さんと約

せしもの今は去て我に離れ我を棄て加ふるに我をして窘感出つるに
 途なからしめんと企つ然るに是又長く續くものにあらず彼都城の民
 が一たびは厚く迎へ次には冷かに待ちし彼の將軍を今やまた其國の
 光彩と誇りつゝあるが如く我を棄て我に背きたる渠は未だ幾日も經
 さるに復た我に來り我に跪きて我をたゝえ我を替して共に今後の行
 路を同ふせん誓ふ雲の變するや急なりされど人情の轉變の急なる
 亦之と同じき也電の動くや激しされど人情の轉變の激しき決して之
 に劣らざるなりかく急にかく激しく向背離合愛憎和諍を繰り返しつ
 ゝ展轉として妄情の風のまにまに轉廻すこの一個の廻燈籠即ち是れ
 此世の人情なり

然り是れ一個の廻燈籠なり我等は此前に坐して些少だも怨恨瞋恚
 の思あらざらんことを要す軒頭の晚風にせつせと廻りつゝある廻燈
 籠を見て何處にか怒り腹たつ子供あるべきぞ若し人情の此廻燈籠に

對して其爲めに悲み怨み若くは怒り腹たち甚しきは之かために狂ひて終に果敢なき死をだに遂くるに到らは軒下の嬰兒に對しても耻しからずや況んや爾く之を悲み怨み怒り腹立つ我自身亦正に此同一の變轉し易き人情を有せるものなるに於てをや

我友よ他人の薄情を思ふ時先つ静た自身か果して他人に對して薄情ならざるやを檢せよ他人が向背常なきを思ふ時自身の心また他人に對して同じく向背常なきかを調べ見よかく檢しかく調べ見る時我等は實に自心亦た變轉常なきに驚かすんはあらず他人の情想と同じく我情想また暫くも己まで向ひては背き離れては合ひ愛しては憎み諍ひては和し同様経路を幾度となく繰返しつゝあることを認めすむはあらずされば他人が廻り燈籠たると同じく自心亦廻燈籠たるなり他人か妄情のため動かされて轉廻しつゝあると同じく自身亦同じく其風に動かされて轉廻しつゝあるなり

されは共に廻燈籠となつて同一妄情の風に轉せらるるも其廻轉の軸や異なり渠や渠自身の樞軸を圍つて轉廻し是は此自身の樞軸を圍つて轉廻す是に於てか其廻轉の歩調必ずしも一なるを得ず渠の可とする所此必ずしも可と認めず此が是とする所彼時として非とすることあり兩者の不和茲に生ずるも船中の人其船の進行を知らざるかごとく車の上の人其車の轉回にかさるかごとく彼此の廻燈籠は各其自己の變轉を忘れて唯他人の變轉のみを見自己の向背常なきを忘れて他人の向背常なきをのみ認むるが故に兩者の不和は茲に憎嫉を生じ怨恨を生み瞋恚を成し其他一切の煩惱を起し來らすんばやまさらんすとのなり淺ましけれと是れ人生の實相也

されは我等若し此煩惱の迷悶を離脱せんさせは先つ自他の共に變常なき廻燈籠たるを明かに觀取せんことを要す而も之を觀取する先つ之を超脱するを要す舟の動くを知らんには舟を去つて之を見る

に如かず車の轉するを見るは車外の人の尤も能くする所なり厭離は
 人道の要門也我等此要門によつて先づ轉變の自己を去つて高く如來
 不動の小心に入る我等茲にはしめて自己其者の轉變を明かに認むる
 を得る也今までは他人のみ變りやすく恃み難きものなりと思ひぬさ
 れど今は自己の亦變りやすく恃み難きものなるを認めずんばあらず
 今までは他人のみ冷熱常なき薄情の徒なりと思ひぬされど今は自己
 亦同じく冷熱常なき薄情の徒なるを認めずんばあらず既に之を認む
 我等は他人の薄情を誘る前、先づ自己の薄情に泣かん他人の轉變常な
 きをかこつ前、先づ自己の轉變常なきをかこたん而も亦翻つて之を思
 ふ今や身心は其轉變の自己をすて、高く不動の佛心にあることを乃
 ち此佛心を觀得し來つて之に憑り之に安んじて而して彼の人情轉變
 の實相を見る時に却つて一種の妙味を感せずんばあらず軒頭の

一小廻籠猶單に稚兒のみならで大人の感興を催すに至る人生のこの

大なる廻燈籠如何ぞ多大の興趣なからんや見よ讚めし者誘り誘りし者讚めたすけし者背き背きし者たすけ來りし者去り去りし者來り集ひし者散し散せし者集ひてぐるりくど廻り行く此上に殆ど言ふ可からざるの神興を感得すべからずや。

雲と電とにして止まらば其色に何の趣かある廻燈籠にして廻る能はずば其影に何の興かあらん廻れ燈籠爾の好むがまゝに廻れ我等は少しも回らぬ不動の佛心に坐して此回りく己まざる人情の趣多き燈籠を眺めつゝ興せん而して此燈籠の油盡きて其幻の花の如き影人生の宿の軒に消ゆるとき我等は靜に其軒を去つて安らかに大悲光明の床に息はむ。

是れ如來の子の享得する人生の興趣也。

*

*

*

*

*

*

四三。形相及び靈體

燈を點じて來る人あり、これに遇はん者は、先づ燈の光を認めて、其光によりて其中に其人を見る、而も其人は燈光の生せる所にあらず、光を生せる者なり、光の末に非ず、光の本也、若し光によりて其中に其人を認め得るが爲めに、光こそ其人の本なれといふ者あらば、誰か其愚を晒はざらん。

人を觀る者は、先づ其肉を認め、形を認む、而して之によりて其中に其心を觀る、而も其心は肉の生せる所にあらず、肉を生せる者なり、肉の末に非ず、肉の本なり、若し肉によりて、其心を測り、其心を觀るべきが故に、肉こそ其心の本なれといふ者あらば、是れ正に謬れる者也。

宇宙を觀する者は、先づ其萬差の現象を認む、而して之れより進み、之より窺ひて、其中に大靈の實在を拜す、而も大靈は現象の成せる者にあ

らず、現象を現せる者也、現象の果に非ず、現象の因也、若し現象より進みて、其中に大靈を拜すべきが故に、現象こそ大靈の本なれ、大靈は單に現象の生起せる、偶爾の一勢力のみとあけつらふ者あらば、是れ本末顛倒の誤謬に墮せる者也。

本末は願倒すべからず、心は肉の本也、大靈は萬象の大元也。

四四。人の一生

人の一生は、重荷を負うて、遠き道を行くか如し、とは是れ未信の者のいふ所也、如來の子は此の如く信せず、渠は、人生を以て、何等の荷をも負はで、徐に故園に皈る旅路なりと認む、そは渠が爲めに、如來渠が一切罪惡の荷を負い、又渠がために、如來、其國を莊嚴して、渠の進み入るをまちたまへはなり。

四五。二宮尊徳曰く

善人は能く悪人の非を見て、善人の非を見ること能はず。他なし。善に僻すれば也。悪人は能く善人の非を見て、悪人の非を見ること能はず。他なし。悪に僻すればなり。貧富奢儉勤惰の類、皆然らざるなし。我が道を行ふ者知らざるべからず。

隣里に赴く者、中路驟雨に遇へば、必ず走り販りて簑笠を用ゐ、或は趨て人家に入つて、以て雨の歇むを待つ。然らざれば、則ち沾濕の患を免れざる也。我道を行ふ者、或は事變に遇ふこと、猶寒暑風雨あるか如く、又猶春生秋殺あるか如し。順逆消長、必ず免るべからざる者也。苟くも事變に遇へば、則ち驟雨に遇ふの心を存じ、以て徐に之に處せば、必ず駭いて、遽に措を失することなし。然らずんば、その功を全ふすること能はざるなり。

心を貧に處せば、則ち富を得。心を富に處せば、則ち貧たり。田産百石ある者は、五十石の貧に處すれば、別ち巨産の富を得。田産五十石ある者、百石の富に處すれば、則ち無産の貧たり。

四六。歡樂の中に於ける反省

我友よ、爾都門の紅塵をうるさしと思ひて、暑を山中若くは海濱に避けんとする其時、天下幾千萬の同胞は、爾か厭ふ其紅塵の底に玉なす汗を留めかねつゝ、勞作しつゝあることを忘れされ、殊に其勞作か一どして、爾自身に關せぬものなく、爾一身のためならぬものなきを忘るゝこと勿れ。

かくて爾は、瀛車に乗らん、而して時に其客室の塵多きに眉を擧めん。されど此時、其機關室には、爾を速に其山中若くは海濱に送らんか爲め

に爾の同胞は沸き狂ふ黒煙に燻りつゝ其機關を運轉せしめつゝあることを忘れされ而して又多くの兄弟は爾か遊興のたびに禍あらじと憂ひて爾が僅かさし込む日光にだに其車窓の戸を閉つる時金をも熔かさん計りの日光に焼れつゝ爾が馳せ行く鐵道の前後左右を監視し修理しつゝあることを忘るゝ勿れ。

かくて爾は其望める白雲に臥せむ或は海濱の松籟に息はん此時爾か手にとる一罇の麥酒は今爾か胸中の積悶を忘れしめんかために爾の憐むへき弟妹か其低廉かる賃金にも小言いはす其残忍なる雇主の待遇をも忍びて日々勞作せる其誠實の滴なるを思へ而して又爾が側に點せられたる一臺の紅燈は今爾か旅情を慰めむがために爾の貧しき骨肉が様々の憂愁の中に悲歎の涙をはらひ痛苦の胸を抑へつゝ絶へす努力せる其親切の影なるを思へ。

既に燈や彼親切の影なりさればこそ能く爾が旅情を慰むるの力を

有するなれ酒や彼誠實の滴也故によく爾が積悶を拂ふの味を帯ぶる也若し彼等をして一點此誠實を缺き此親切を有せざらしめむか爾は不慮の變に遇はむ彼の工夫と車員とをして毫末にても爾に對する慇懃の心を失はしめむか爾の車は直に倒れん而して爾は直に傷き或は直に死せむされば若し爾の遊興の旅路に些少の禍災なからんか嗚呼是れ爾の力にあらず一にこれ爾が遊び戯れ酔ひ歌ひ眼り夢み躍り狂へる其間に絶へず勞作せる爾が兄弟姉妹の恩恵たる也。

我友よ我等は今必ずしも爾に向つて暑中の遊興を全くやめよと強ゆるものにあらず唯爾に求むる所は爾が一片の同情を哀れむべき同胞の上に向けむこと也想ふに彼等は多く分別よき者也爾より此の如き同情を得むとは彼等が決して求めざる所ならむされど求めず請はざるに與ふるは是れ如來の御心也如來の子たる光榮を與へられたる者共に願くば少なりとも此御心を我心とせばや而して自己が歡樂

のうちに一念この歡樂か同胞の恩惠によりて與へられたるものなるを反省し一片の同情を願くは彼等同胞の前に捧げよ。

彼等は此同情と感謝とによつて如何ばかりか喜を得む爾等は彼等か盡誠に喜を得彼等は爾等か感謝に喜を得共に如來大心の我等を通じて顯現したまへる此盡誠と感謝とに限りなき喜を得つゝ此苦勞多き人生にありて互に和樂の生活を進む正しく是如來の子の生涯也。

四七。月夜の感

水の如く澄める空にかゝれる月おゝ愛らしの月影よ慕はしの月影よ。

その銀の如き光りの我に注がる時我は忽ちに爾の清容に酔い身を忘れ世を忘れて自ら爾と共に天上にかいやくの慨あらしむ。

昔人は爾に對して悲哀の念を起せりされど我今爾に對する時胸に秘める悲しみも身にあまる煩もいつしか晴れて自己の胸中に白玉の心を藏する如く思はしむ。

月よ秋の夜の月よ爾は我がためか戀人なるよ師なるよ親なるよ。我爾の光にあこかれて夜すから野にさまよへは葉末にかはゆき虫の我を送り迎へて妙なる樂を奏するあり。

爾は天を行く人よ數多き天の虫たる星は爾をとりまきて琴憚けり。我は地を行く月よ數多き地の星たる虫我をとりまきて歌へり爾はこの星の樂に調子とられて歩まむ我は虫の歌に調子とられて行かむ樂しや天上の地球上の月。

月よ我は月おゝ天上の月爾の其清容を葉末の露にやとして幾萬の光あらしむ我か容姿天にうつりて星を印すと思ふの快これ爾の賜ならずや。

知人の死に趣く流車の窓にも爾は我を慰めぬ母の手を取り公園を散歩せし夜の森にも爾は我を照しぬ野に出て、野に椽に坐して椽に、我は常に爾の清容に對して多大の快樂と安慰とを得たり。

世の人は爾を地塊なりといひ、又水塊なりといふ、而してまた人の住む世界なりといひ、住まぬ世界といふ、我は爾のいかなる体なるかを知るを要せず、我はたゞ、爾の清容の光明の我を照し、我を慰むるに感應して、愛慕崇拜の念にたへざるなり。

我爾の徳を稱へんために地上の花を以て例せんか、當らす昔の聖賢を以てせんか、當らす昔人爾を慈悲の主、觀音を以て例とせり、我は爾を譬ふるに我等の如來を以てせんか、敢て當らざるにあらず。

如來の清容は常に我に臨みて力を與へ、安慰を與へ、悲しき時に喜はしき時にも淋じき時にも悶ゆる時も常に我に來りて我を導きたまふ、故に我常に月影に對して、我如來の光明の威大なる徳に感謝せざる

はなき也。

お、月よ、爾の清容の最も清くなる頃は、地に多くの穀類の實のる時なり、米、豆、稗、皆此時に熟す。

お、月よ、爾の客姿の最も清くなる頃は、木の葉はうつくしく色付くよ、而して罪の世を去りて、大氣に化し行くよ。

我等如來の聖容を清らかに拜する時、人生の營養來り、生命來り、人の心は信仰に色つき、て永久の淨邦に販る、あゝ大なるかな、如來の清徳、我等は日夜にこの徳に感謝せずんばあるべからず。

四八。如來は生命也

如來は生命也、萬物之り依りて活き、宇宙之なくして死に歸す、如來に頼る人は生命の人也、如來を信せざる人は生命なき人なり、死

せる人なり。
如來にたよる國は生命の國なり、如來を拜せざる國は生命なき國なり、死せる國なり。

人は病に依りて死し、國は軍人なきによりて滅すと思へる人よ、死して死せず、滅して滅せざる如來の妙用をしらすや。

人は薬によりて生きず、如來によりて生く、國は軍備によりて生きずして、如來によりて生く。

故に衛生をいひ、軍備を云々しつゝ、如來を知らざる人は自ら死に急ぎ人を死の門に誘ふ人也、憐れならずや。

如來は生命也、我等之に歸して生命あり、かくて我等の國は生命の國也、道友よ、如來の願船に乗じて、この生命の國に活ける人とならずや。

四九。天地の殺活

如來の大靈を天地に觀せざらんとするは、天地をして生命なからしめんとするものにあらずや、即ち天地を殺さんとするものにあらずや。天地固と殺されず、然も其罪を如何せん、そは殺すことは固と大罪なるに、今天地を殺さんとする、大罪何ものも之に過ぐることをなければ也。
如來の大靈を天地に觀するは、天地に生命あるを觀する也、即ち自心に於て、其天地を活かしめ、來るの謂也、天地新に活きず、而も其徳や大なり、そは活すことは固と大善なるに、今天地を活す、大善何ものもこれにこゆることなければなり。

生命ある天地に、生命ある大善の生活を送らんは、生命なしと思ふ天地に、生命なき大罪の生活を送らんに、孰れそや。

*

*

*

*

*

*

五〇。爾は常に爾たり

位地高まりて名聲大に揚る時精神主義は警めて曰く心せよ爾は決して爾の大を加へたるに非ず何となれば地位は爾にあらず名聲また爾にあらずはなり爾にあらずるものゝ高まりまた揚る爾にとつて何の利する所かあると位地下り名聲地に落つる時精神主義は慰めて曰く愁ふる勿れ爾は決して爾を小ならしめたるにあらず何となれば地位は爾にあらず名聲亦爾にあらずは也爾にあらずるものゝ降りまた落ふるゝ爾にとつて何の損する所ぞと

同朋我を助け妻子我を愛する時精神主義は戒めて曰く注意せよ爾は決して爾の身の幸福を加へたるにあらず何となれば同朋は爾にあらず妻子亦爾にあらずは也爾に非ざる者の來り集まる爾が爲めに何の幸福をか加へんと同朋我を棄て妻子我に背く時精神主義は勵ま

して曰く嘆かされ爾は決して爾自身の幸福を損へるに非ず何となれば同朋は爾に非ず妻子は爾にあらずはなり爾に非る者の乖離爾がために何の不幸をか來さんと

五一。顯在の人潜在の人

釋尊は顯在の佛陀我等はこれ潜在の佛陀也

孔子は顯在の聖人我等はこれ潜在の聖人也

耶蘇は顯在の偉人我等はこれ潜在の偉人也

佛陀聖人や偉人や我等を相距つること僅に潜顯一字の差而已あゝうれしきかな我等この現在の心を以てして直ちに佛陀とも聖人とも或は又偉人ともなり得ることや

提婆は顯在の惡人我等はこれ潜在の惡人也

盜路は顯在の盜賊我等はこれ潜在の盜賊也。

ユダヤの人は顯在の偽善者我等これ潜在の偽善者也。

悪人や盜賊や偽善者や我等に相去ること僅に潜顯一字の差而已あ

かなしきかな我等この現在の心を以てして直ちに悪人とも盜賊と

も或は又偽善者ともなり得ることや。

然らば我等は善人なりとも必ずしも誇るべからず我等はこれ潜

在の悪人にあらすや我等は悪人なりとも必ずしも悲しむべからず我

等はこれ潜在の善人にあらすや満天雲なきも長へに雲なき能はず四

方皆雲もてとさいるいども大陽一たひいでなはその雲や散せん此故

に我等は徒に我等か善惡邪正を泣汰せんよりは唯偏に大悲の光明を

喜はんかな。

五二。三浦安貞曰く

金は天下の至寶也之を貯ふるものは家富めりされどこれによりて
身を失ふものあり人參黃耆は藥の隨一也されど之を服して命をおこ
すものあり劍術兵法は身を衛るものなりされど之によりて身を殺す
ものあり醫術は人を救ふものなりされど之によりて人を殺すことあ
り飲食は生を養ふものなりされど是によりて我体をやふることあり
國の大臣は國を治むべき者也されど之によりて國を亂ることあり此
さかひよくく工夫すべし。

五三。如來の我を信じ給ふこと

如來の我を信じたまふこと何ぞ深きや我等は永劫以來如來を信す

ることなかりし也。然るに如來は永遠の古に於て、正に攝取の大願を起し、此大願によりて我等が必ずや竟に救はれ得べきを信したまへり。一たひ之を信す、如來はまた聊かだも此信を動かしたまはず、我等が罪より罪に降る時、汚れより汚れに沈む時、猶我等を信してすつるとなく、常に呼ひ絶えず警めて、永劫の間、一念一刹那、清淨ならざるなく、眞實ならざるなき至誠の確信を以て、我等を招喚したまへり。嗚呼、信するは力なり、何もこのか、此宏大堅固の如來の信に動かされざるものぞ、我等は終に此に如來に向はざるべからざるに至りしもの也。

我友我等の向上を以て決して自己の力なりと思ふこと勿れ、一々是れ如來の信による也。如來の信は我々我等が信の源也。我等一切衆生の心的靈的進歩の唯一動力唯一源泉は、此如來の信を措いては決して何處にも存せざる也。

* * * * *

五四。眞實の經典

黄卷赤軸六千餘卷の經典に於いて、我等は如來の大道を領得せむ。これ經典は之のみにあらず、浩々たる大千の萬象亦是れ大道の經典也。芥爾一念の自心、又是れ正法の聖教也。如來は其靈の筆により、靈の文を以て常に其大靈の奥旨を、此二種の經典の上に示したまひつゝあるなり。

黄卷赤軸の經典は、財なくんば得られじといふともあらむ。又之を得るも、藏むるに途を失はば、破れ損はるゝといふこともあらん。されど天地と自心の大經典は、如何に貧しき者の前にも同じく示さるゝ也。藏むるに心を煩はさずして、こは永遠に保存せらるゝ也。殊に自己心靈の秘奥に與へられたる經典は、眼なきも讀むべく、耳なきも聴くべく、智なきも識見なきも、苟くも之を受け得たるほどの心靈あらんには、何人も

之を以て是を解すを得べし而してこの經典こそは是れ一切經文の本
 典なれ一たび之をよみ之を解す乃ち黃卷赤軸の經文を解すべく天地
 自然の聖教を了すべし若し未だ之を讀まず之を解せざらんか八萬の
 法藏をしることも愚者たり自然の萬象を説明しうることも死葛藤のみ決
 して彼の法藏の中此萬象の胸に生々躍動しつゝある活生命を觀取し
 之に觸れ之を受け以て自己の上之を體現し來りて自己をして新生
 の人たらしむること能はざる也
 されば外を觀む前、先づ内を觀よ、他を繕かん、先たち先づ我を繕け
 物を讀まむ前、先づ我心靈を讀め、此に始めて眞實向上の門は我等がた
 めに開かれ來る也

五五。勞働の本義

靜に如來の與へ給ふ靜觀に還りて、こゝに勞働の本義を思ふ。
 我等は生活せんがために勞働するにあらず生活するを得しめられ
 たるがために勞働する也、衣を得、食を得、家を得んことを欲して勞働す
 るにあらず、衣を與へられ、食を與へられ、家を與へられたるがために勞
 働するなり、即ち當來の生存を計らんがために勞働するにあらずして、
 過去及現在に亘りて、我上に此生存を與へられたるか故に勞働するな
 り、約していへば、勞働は自己生存の恩恵に對する御禮也、若し然らずば
 此宏大なる恩恵を如何にせんとするか。

こゝにまつ自ら警め、他を警む、

五六。力を信せよ

力を信せよ。如來の力を信せよ。如來の力は現在の我を救て、過去の我を救て、未來の我を救ふと信せよ。

世の人はいふ、人自ら信する所なかるべからず、自己を信せざるべからずとされど我等には以て信すべきの力ある事なし、されは我等は何を信せんか。

力を信せよ。他力を信せよ。我等の生するも他力也。我等の成長せしも他力なり。我等死するも亦他力也。

我等日々自己の意志によりて生活せりと思へるは迷へるかな。我等は日々他力の妙用に動かされつゝあるなり。故に我等は深く此他力の妙用を身に帶し、他力の妙用の自己に加はるを信して精進なるべし、勇猛なるべし。

他力を信するとは、他力にたよる也。他力にまかすなり。他力にすがる也。他力にたよる故に我等に勇氣あり。他力にまかす故に我等に安慰あり。他力にすがる故に我等に指導あり。故に我等は他力を信するは我等の生命也。光明也。この心あり。以て世にありて力強く、人に對して愛情を有するを得るなり。快なるかな。力を信する事や。

五七。信念を主とする生活

如來を信するか故に、我等を友とせすといふ者あらば、我等は斷乎として答へむ。

よしさらは、我は汝と友たらさむ。否、好まされとも友たるを得さらむ。我が全身は既に之を如來に托せり。我が全生命は既に之を如來に捧げたり。否、我が全身は如來に賴りて洗はれたり。我全生命は如來により

て永遠の天地に蘇生せり。かくて我等は如來を親とし、師とし、友とし、之に慰められ、之に導かれ、之に勵まされて世路を行かん。とす。我等元より世の友のたのみ少なきを知り、世の師の多く求むべからざるを知り、世の親の永久の安慰者にあらざるを知り、知りて如來に行けり。如來に行いて眞實の親と眞實の師と眞實の友とを得たり。故に我等は如來の御名を稱うるかため、の故に親をも捨て、師をも離れ、友をも願みさらん。汝、我に對して如來の御名を呼ぶをやめよと云ふは、我に身を亡せと命する也。我に精神の死を命する也。我は永遠の墮落に行くを好まざる也。我は永遠の死に行くを欲せざるなり。よしさらは、友よ、憐れなる友よ、今に世の煩悶に泣き、世の無情に怒るべき氣の毒なる友よ。我は汝を獨り殘すを好まず。されとも、汝は我に汝よりも、友として汝よりも、我が精神の痛苦を根本的に醫すべからざる友として、の汝よりも、より健全なる、より萬能なる、より親切なる友のあるあり、師のあるあり、如來

といふ親のあるあり。此の親を呼ぶの樂しみを去りて、いかて汝と共に死に行くを敢てするを得べき。いざさらは、憐むべき友よ、暫し別れん。汝か我と共に如來の懷に兄弟となり、共に如來の御名を呼ひ、尠く共、我か如來の御名を呼ぶを喜ぶに至りて、我は汝の友たらむ。汝は我の友たらむ。友たらんよりは寧ろ兄弟たらむ、親子たらむ、師弟たらむ。我は其根本を一にする友としての汝を待つ。の情や切也。汝冀くは一日も早く其迷夢を覺醒し來れ、以て共に御名の下に働かんかな。

如來を信するか故に、我等のために進路を開かすと云ふ者あらは、我は斷乎として答へむ。

よしさらは、進路を開かされ、我は汝の力の能く我か進路を開くに適せずと信するか故に、能く斷乎たる答をなすにあらず。我は汝の力によりて、利を獲るを得む、名を獲るを得む、或は地位を獲るを得む。されど、其利や泡沫の如き利也、その名や紅霓の如き名也、其地位や浮雲の如き地

位也。我等いかて此一時の利と名と地位を獲るかために、永遠の利と名と地位を捨つるを敢てせんや。永遠の利と名と地位とは既に如來を信することによりて、我か進路に横はれり。然るを汝はこの如來をすて、一時的の便誼に就けよと云ふ。唯一時的の利と名と地位とのみあるを知りて、永遠の夫等あるを知らざる者の語としては、或は以て聞くべし。憐れなる友よ、我は寧ろ汝に云はむ。汝はその頼みとせる一時的の利と名と地位とは汝のために永遠の進路を開かざるべし。故に我と共に如來を信することによりて、永遠の進路を開きて頂かな。否と云ふか。さらば云ふも詮なからむ。汝は汝の思ふ儘に行け。我は我たり。敢て我か進路のために力を借らす。請ふ。汝心を安せよ。我には我か進路を開くについで、汝の及ぶ能はざる力を有せる。宇宙の大靈のあるあり。何ぞその大靈を捨て、小なる汝に就かむ。冀くは一日も早く汝の迷夢を覺醒し來れ。來りて我と共に大威力の下に進路を開かれつゝ行かむ。何と云

ふかざる事を云はんには、我は汝のために進路を閉塞し、くれんとかよし。汝の力を以て我進路を閉塞し得べくんは閉塞し見よ。愚かや友。大水の將に決せんとする焉んぞ。雙手の能く支ふる所ならんや。我には如來の大威力。大靈の大活動の加はるあり。我か進路はこの御力によりて開かれつゝあり。汝の輩如何にこれを妨げんとするも焉んぞ。これを敢てし得べきや。友よ覺めずや。我と共に如來によりて進路を開かれつゝ行かすや。

友あり、云はむ。我汝に巨萬の富を頼たんことを欲す。されど我汝の如來を信し、如來の御名を呼ぶを心よしとせず。汝にして若し其信仰を捨てんか。汝は今日より其貧を脱して巨萬の富者とならん。いかに汝其信念を捨て、我に來らすやと云はんには、我は斷乎として答へん。

謹て汝の厚意を謝す。されど我は如來を去りて富者たらんより、如來を信して貧者たるを喜ぶ者也。我は既に世の富の精神の煩悶を醫する

に足らず平和と自由との生活を得るに價値なきものなるを知る而して我はこの世の富によりて得る能はざる精神的の快味をば如來を信することによりて得つゝあり然るを今更何ぞこの盡きざる精神的の富を去りて浮雲の如き富を得んと欲せんや汝は我に巨萬の富を頼たんとす然るに我却て汝に云はむ汝その富みて而して精神の満足を得ざる憐れなる汝に云はむ冀くは汝かその頼るへからざる世の富にたよる心を離れて如來を信せよ如來を信して我と共に如來が頼ち給ふ永遠の富に満足なる生を送らんことを望む

又友あり汝若し其如來を信し如來の御名を稱ふるを止むれば大臣たらしめんと云はんはんに我は否と答へんさらば國を與へて國王たらしめんといはんに我は斷乎として云はん釋尊が頻婆娑羅王の誘を退け給ひしか如き勇氣を以て嚴然として云はむ否とよ何となれば如來を信することによりて我は全宇宙の主人となるの趣味あり何ぞその大

なる主宰者たる信念を捨てし小國の王たらんや汝それ他を云へ我は汝の誘を殆ど滑稽としか聞かざる也一圓を得るかために百萬圓を捨てよと云ふ人若し愚ならば國王の位のために信念を抛てよと云ふ者多く賢しと云ふべからざる也

我等は順境の誘に對してかくの如くなると同時に逆境の迫害に對してもまたかくの如くならざるへからず如來を信する者は國外に追放せられんと云ふことあらは我等は如來を信して國外に追放せられむ如來を信する者は首刎ねられむと云ふ事あらは我等は如來を信しつゝ首刎ねられむ弟子住蓮房安樂房は念佛禁制の高札の下にて念佛したりとて首刎ねられぬ之によりて其師法然聖人共に罪せられて讃岐の國に流罪に處せらるゝの日尙專修念佛を宣傳して止まず弟子西阿彌陀佛なる者云ふ師復此事を云ふ勿れ師曰く汝經釋の文を見すや西陀曰く經釋の文は是著明なりと雖も世の機嫌を如何せん師曰く法

の爲に命を輕す吾死すとも悔いず敢て云はざるへからざる也我等また此決心を以て我等の信念を維持すへき也否我等自らせんよりも如來は我等をして然かく堅固に保たしめ給ふや必せり我等は世の思はく機嫌を顧みて信念を輕せざる様心かくべき也
 要するに我等の生活は信念を主として他を伴とせざるべからず故に我等は生活上の種々の便宜上この信念を表白するに應ずべからず順境に移らす逆境に恐れず茲に信念の光明あり茲に如來の威力あり我等はたこの光明と威力の動かせ給ふ儘に生活して其他の名利地位身命朋友妻子國家などは如來を信する助縁とならば之と和し妨害とならば之を退けつゝ進むべき也故に我等佛の御教に従ひ如來を信する者は何れの場合如何なる人に對しても自己の信念を維持し表白するに耻づるなく恐るゝなからまほしき也我等は道友と共に法然聖人の語を誦さむ

現世の過ぐべき様は念佛の申されんやうに過ぐべし念佛の妨になりぬべくは何なりともよろづ厭て是を止むべし謂く聖て申されずは妻を儲けて申すべし妻を儲けて申されずは聖て申すべし住所して申されずば流行して申すべし流行して申されずば家に居て申すべし自力の衣食にて申されずば他人に助けられて申すべし他人に助けられて申されずば自力の衣食にて申すべし一人にて申されずば同胞と共に申すべし共行して申されずば一人籠り居て申すべし衣食住の三は念佛の助業なり是則自身安穩にして念佛往生を遂げんがためには何事も皆念佛の助業也三途に歸るべき身をだにも捨てがたければ願みはくゝむぞかしまして往生ほどの大事をはげみ念佛申さん身をばいかにもくはくゝみ助くべし若し念佛の助業と思はずして身を貪求するは三惡道の業となる極樂往生の念佛申さんがために自身を貪求するは往生の助業となるべき也萬事かくの如し

人各々誇る所あり、標的とする所なかるべからず。他は知らず。我等は如來を誇らんかな。信念を標的とせんかな。而して我等はこの如來の御心の儘に、この信念を我等の看板として世に働かん。故に我等は常に我等は如來を信する者なりといふに躊躇せず。如何なる場合にありても如來の御名を呼ぶを耻ぢず。寧ろ憐れとすべくありたき也。かくて世の一切はこの信念のため、の助縁と心得、人生の意義をば如來に頼ること。に頼りて、覺知し、以て力ある希望ある永遠の生命の大道を、静々と進み行かんかな。

希望大に、身心小也。慈悲なる大靈よ、冀くは汝の御力を加へさせ給へ、御手に導かせ給へ。南無阿彌陀佛。

* * * * *

五八。實りぬ、落ちぬ、

稻は實りぬ。桐の葉は落ちぬ。蟬鳴かすなりぬ。虫の音夜々に細り行く。我等を苦しめたる蚊は何處に行きし。月光清冷也。星の林を鳴きわたる。雁誰か魂の行衛そや。

* * * * *

五九。定めなき世

或日の團欒に、一人はその壯健を誇りぬ。他の一人はその羸弱を啣ちぬ。かくて後二日、嚮きに壯健を誇りし者、病院の人と成り、嚮きに羸弱を啣ちし者、病院の友を見舞ふべくなりぬ。實にや人生の事一寸先は暗なり。されは誰か百年の形体を持つべき我や先人や先今日共知らず。明日と

も知らず後れ先たつ人は本の雫末の露よりも繁しと云へり。

かゝる世に何を望みの憂き思ひ何を悶えの悲しみぞや。過去を見、現在を見、又將來を見れば、人生萬事茫として、夢の如し、幻の如し。今日成功の人、何ぞ明日失敗者たるを計らんや。今日榮華の人、何ぞ明日墓裡の人たるを計らんや。あゝ人生何ぞ夫定めなき。かくて我等、何を力に世にあらむ。人は云ふ氣弱しと。さあらん、我自ら笑ふ我か氣弱きを而して我か氣弱きは事實也、又我をして氣弱からざるを得さらしむる世も亦事實也。あゝ事實を如何せんや。

我等常住の如來を信することなくんは、或は自殺者となりつらむ。或は世を呪ふ者となりつらむ。或は世を怨む者となりつらむ。さるをうれしや。如來の御心常にこの弱き我に來りて力となり、光明となりて導き給ふ。

感謝す救ひの御親、爾は常に我等に來り給ふて我等をして生を完う。

念せしめ給ふ。爾は常に光明となりて我等を導き給ふ。願くは慈光我を護念して、この弱きに幸あらしめ給へ。たよる大靈の御親。

六〇。流星賦

永劫我は迷ひぬ。いつ何處よりとも知らず、久方の空のかたすみにさまよひ出てしか。渺茫たる彼處のさひしさは、暫も我を安せしめねは、せひとも平安の宿たつねはやと思ひて、更に旅たちしより、茲に幾億萬年、時に西に馳せ、東に飛ひ、折には南數千里の遠きに行き、北幾萬里の遙かなるを廻りしかと。未だ曾て我宿を認めさりき。固より數多き恒星の家は、花の如く、天上のあなたに輝けり。されど光なき一小塊に過ぎさる。賤しき我は、尊き彼の家の軒にさへ近く能はず。ために其美はしき光を望みつゝ、我は空しくさまよひにさまよひを重ねき。さひしさの痛みはい

よく我胸に加はりぬ旅の勞れは新に我身を苦しめぬかくて恨と怒
とさへ我心に狂ひて我は時に思ひぬ浩々たる此六合は竟に是れ我に
對する迫害の牢獄にはあらざるかと

されど君よ我は誤りし也我か牢獄と思ひし此世に平安の宿は我が
ためにそなへられき長かりし流轉の極我は今圖らすも斯大坤に近
り雲は白く茲に飛び霞は紅にこゝに流るこの麗はしき大坤は我が自
ら覺らざりし間に我を引きつゝありしなりわが痛み苦しみ恨み怒り
し其間にわが流浪の身たるを咎めず否かゝる身たるが爲に殊に其力
を以て我を招きつゝありしなり我いかで其厚き恩に動かされざらん
やわが馳するのわけて速なるは之がためなり我は固より我が賤しく
小やかなるを知れどこの厚き恵みを念ふ時賤しきをも忘れ小やかな
るをも忘れて唯此大坤の招くまにまに疾く走らざるを得ざるなり
かく走る時君よ我は氤氳たる大氣を感ず而して其氣が冷かなる我

身の中心にまで漸く及べるを感ず且つ見よ我に光あるにあらずや我
は光に生れたる也醜かりし一團の黒塊は今や光の身也今まで我が美
みし花の如き天上の諸星と同じき身の上也君よ我は何のすべもてこ
の大なるめぐみにこたふべきか

君よわが享けたる光の命の長からぬを以てわれをわはれむをやめ
よ我が生はとはなり光ある間はたとひ短くとも此大坤の上にありて
此大坤の徳をかさらむ光きえなば降りて麗はしき地上の宿に眠り若
くは出てゝ大氣と共に他のさまよへる我が友を迎へむ我は長く此平
安の宿をはなれざるなり

あゝ迷ひたりし兒は宿をえたりさびしかりし漂泊の身はにぎはし
き榮えにつゝまる彼の今まで我が羨み嫉みし天上の諸星は若しや我
の今のことをほかんためにまきちらされたる散華にはあらざるか

* * * * *

六一。佛實に在り

如來實に我上に在まさば、願くは其御相を多くの古聖の前に現したまへる如く、我が前にも現したまへ。我は疑多き者也。如來の御相を拜したまつらば、如來を信じたてまつること能はざらんとす。願くは夢の中にも可なり、一たび我をして爾の靈容を仰ぐことを得しめたまへ。

如來實に我を救ひたまは、願くは其招喚の御聲を、少からぬ先賢に聞かしたまへる如く、我が耳にも聞かしめ給へ。我はこの他力攝取の大法を以て迷妄なりとは思はず、皆是れ古聖先賢の誠實なる衷心の奥底より響き來りしものなるを思ひ、其上に尊嚴の光あることを認む。而も我は未だ我が全體を此大法のために託すること能はず。何となれば我が今迄さけるは、唯之を我に傳へたる者自身のみの上にあらはれた

る救濟の道に過ぎず。我は未だ直に我に對する如來の招喚をさかず、我に對する救濟の決して間違であらざるの宣言を、如來自身の御聲によりて耳にするを得ざればなり。如來、我を救ひ給ふこと若し眞實ならば、願くは、他によらず直に、我が耳に爾の我を呼びたまふ御聲を傳へしめたまへ。

我等が心靈的向上の路は、時に此一段の難關に逢着す。此時、人は我を迷へりとし、友は我を狂へりと云ふ。されど一たび起れる衷心の要求は、たやすく消すべからず。乃ち百方途を求めて、此望に向ふ。一たび古人が唱名誦經によりて見佛の縁にあへるをさくや、我亦之を試む。他人が禪觀冥想によりて靈音の告を蒙れるを耳にするや、我亦之を行ふ。かくて僞にあらず、戯に非ず、涙を揮つて熱情泣騰す。されど求むること愈切にして望愈遠く、請禱益々激しくして靈境益々距ることあり。是に於て疑ふらく、嗚呼、如來及其救濟實はこれ空なる謔言なるか。而も一方向上

の志は之を許さず乃ち疑と望と向下の心と向上の心と我が一心に戰ふて衷心の痛苦殆ど堪ゆべからざらんぞす。

我友よ心すべきは正に此時也爾に既にこの熱烈の惘誠あり何ぞ進みて先づ其惘誠其者の來處を觀破せざる翻て自己の過ぎ來し方を顧れば何の時か自ら進みて道を求めたることありや流轉の路は長かりき我は其間常に迷妄の狂魔に誘はれて少しだも向上の道に歩まざりしにあらすやたえず情欲の群賊に伴ひていさゝかだも大悲の慈尊を尋ねざりしにあらすや管に歩まざりしのみならず尋ねざりしのみならず我は全く道の何たるをわきまへず慈尊の御名をさへ知らざりし也然るに今我は之を辨へ之を知る而して之を心得之に遇ひたてまつらばやの念ひに堪えかねて今は之に走りつゝある也嗚呼是れ誰が力ぞや大道正に我が背きつゝある其間も我をすてさせたまはで我胸に其御力を及ぼしたまへるにあらすして如何でこの如くなるを得ん慈

尊正に我が知らざりし其間に我を忘れさせ給はで我が心に其御手を下したまへるに非ずして安ぞ此に到るべきされば見よ道は速きに在り佛此を去りたまふこと遠からず我道を求め佛を尋ぬるの惘誠は全く是れ佛心其者なりし也如來の御相は必ずしも遠くにのみ尋ぬべからずいかにもして拜せばやこの我が念正に其御相なりし也如來の靈音は必ずしも外にのみ求むべからず是非とも之を聽きたてまつらんとの我志實は其靈音なりし也如來は正に我等をして如來に近づかしめんために此念を與へ我等をして如來に到らしめんために此志を降したまへる也されば我に對する大悲の證明は此念に存し我がための救濟の宣言は此志に示さる實にこの微なる如く見ゆる向上の思の中に眞實の如來は正に茲に儼在したまふ也

如來既に茲に儼在す此如來は他人の如來にあらず我が如來也縦し世界の學者といふ者をして擧つて如來の實在を否定せしめよ管に學

者のみならず世界萬衆をして共に俱に如來の救濟を認めざらしめよ。而も我に於て何かあらむ。天も碎けよ。地も裂けよ。我は我中に我如來を有したてまつる也。我はこゝに他人に對する救濟に非ず。我に對する救濟の宣言を直に聽くを得る也。我は此に他人に對する招喚に非ず。我に對する招喚の大命を直に受くるを得る也。是に於てもはや師も我を要するものに非ず。友も我を要するものにあらず。父もいらす。子もいらす。社會も要せず。國家も要せず。我は我全宇宙を要せずして。唯我如來を有して之によりてありあまるほどの榮光を享得す。金剛堅固の大信とは正にこの謂に外ならざるなり。

嗚呼。望みて拜するを得ずば。願みよ。仰いで。きいたつまつること能はずば。俯して耳聳てよ。如來の照護は不斷なり。前に居まさすは。後に在まさむ。上に立ちたまはす。下に静坐したまはむ。古聖先賢の如く。高く上に。如來を拜するを得ず。如來に聽くを得ずば。我等は低く下に其聖容を

拜し其靈音に接するを得而して之によりて。无上の大信に入るを得る也。何處に如來を認むべきや。是れ大なる問題にあらず。何れの處にてもよし。唯爾は爾の如來を觀。我は我如來を觀る。我等にとりて。至要至重之に過ぐるの問題は決してあらざる也。

六二。晴雨物語

翁媪あり。二人の子あり。兄は傘を賣り。弟は草履を賣る。

媪は雨ふるや。弟を憐みて悲しみ。雨晴るゝや。兄を憐みて泣く。翁は然らず。雨ふるや。兄を思ふて喜び。雨晴るや。弟を祝して楽しむ。

慈悲を行ふに機會なし。いふこと勿れ。大行の機會は常に我等に與へらる。不幸たえず。我が身を襲ふことか。こと勿れ。歡喜の種子は到處に我等に備へらる。

六三。默想

默想は我等か如来に接するの室也。默想は我等の本心を照らすの鏡也。我等は如来かこの默想を我等に與へ給ひたることを感謝せずんばあらず。

起きし時默想せよ。床につく時默想せよ。歩む時默想せよ。笑ふ時默想せよ。語る時默想せよ。

默想は道にまぐ水の如し。我等の散亂常なき精神の道には常にこの默想によりて塵埃たえず。默想は水の如し。能く我等の熱せる頭腦を冷却せしめて平穩ならしむ。

我等は稱名によりて佛に接すると共に、默想の室に於て佛に接するの經驗を得てのぼり易き散りやすき心に、落付とすはりとの生し來りし如く感ず。

六四。佛恩

天に三光あるも佛恩也。地に百穀あるも佛恩也。雨下り水涌き火熱し。風養ふも佛恩也。一華開き一菓成し。一薬を採り、一珠を出すも佛恩也。山野に途を開き、江河に舟を作るも佛恩也。絲竹の音曲を出し、藝能の浮樂をなすも佛恩也。

又自の視耳の聴き、口の言ひ、身の動くも佛恩也。一衣を衣、一味を味ふも、一命を全うし、一生を終はるも佛恩也。病瘥え、災除き、眷族を得、資具を得るも佛恩也。惡鬼毒龍世を損せず、毒藥利刺人を害せざるも佛恩也。父を知り、子を知り、善を識り、惡を識るも佛恩也。一字を聞き、一句を解し、世善を作し、出世を願ふも佛恩也。

凡ろ是れ冥々たる黒闇の外、人間天上、依報正報、微善微樂、悉く皆佛恩の然らしめすと云ふことなし。

吁○痛○し○き○哉○我○等○幾○千○か○佛○肉○を○食○ひ○幾○千○か○佛○肉○を○吸○ひ○幾○千○か○佛○命○を○
斷○じ○幾○千○か○佛○眼○を○括○り○幾○千○か○佛○肩○に○挂○り○幾○千○か○佛○皮○を○衣○た○る○。

我等今日講師惠空のこの語を讀むまた佛恩ならさらんや。

六五。外に狭く、内に深く

外に大に延ぶる能はざる人よ、汝は徒らに汝の今の境遇を悲む勿れ。
汝願くば其眼光を内に轉せよ。汝が現に外に延ぶる能はざるは、如來
が汝の心を内に向はしめ給ふ也と知らずや。

狭き地に廣き家を建てんとせば層をかさねざるべからず、外に大に
延ぶる能はざる境遇の人は、其狭き天地にありて、心の上に氣高き理想
の家屋を建立すること尤も必要なりとす。

浅きより深さを廣きより高きを、外に延ぶる能はざる時には内に深

く、内に高き信念の天地を開拓せざるべからず。而して如來の慈光に依る
の生活をすること快何ぞ極まらむ。

六六。驀直進前

初秋、風怒りて、總州の海邊波荒れぬ。漁夫、難を怖れて、舟を岸に向け
るは殆ど死し、沖に遁れたるは、殆ど全く生きて還りぬ。海事に通せる者
曰く、恐は、岸にあり沖にあらずと。

我等、永劫以來、住みなれし罪惡の岸頭に立つて、遠く如來大悲の大海
を望む、何人か危惧の念にうたれざる者あらむ。此處に妻子父母の頼る
べきが如きあり、地位資産の恃むべきが如きありと雖も、然も彼處には、
妻子によらず、父母によらず、地位によらず、資産によらず、唯だ一如來の
祐護にたよれと云ふ、何となく覺束なきの思湧然として起り來らざる

を得ず乃ち向上の志茲に沮み、修道の歩終に止まる。
 嗚呼我が友よ慮るべきは正に此時也我等が此岸邊にありて頼るべ
 しとする妻子父母竟にこれ頼るべきもの非ず我が恃むべしとせる
 地位資産亦之れ眞に恃むべきものならず是等は共に幻の消え行く
 也。うたかたの如く破れ去る也。茲にまことの恐あり危みあり我等は唯
 慕直に進んで彼の如來大心の大海に泛はんことを要す決して躊躇逡
 巡すること須みざれ殊に一たび此海に泛ひたる上些少の不安のた
 めに我等は我舟を販すべからず不安の起るは我が舟の未だ海に泛ふ
 こと遠からされはなり遠く大悲の沖に向ふ則ち茲に大靈の大濤常に
 安らかに且つ麗はしく動きて我等は長く其上に眞實の大安を享得す
 べき也。

* * * * *

六七。簡潔明燎の信念

敬で大慈大悲の如來に白し奉る。

八萬の法藏の廣博なるに驚きしは我等なりき。七駄の經卷の浩漭な
 るに怕れしは我等なりき。而して我等は云ひき、佛教の教理捕促するに
 難く、佛陀の境界到達するに難しと。而して我等は又呼ひぬ、我に簡潔な
 る教理を教えよ、我に明燎なる信念を與へよと。

わがのりはしづやまかつのみだれかみ

いふにいはいれずとくにとかれず

とあるは佛教か。

わがのりはあさゆうなでしちごのかみ

いふにいはいはるゝとくにとかるゝ

とあるか佛教か。

昨の我等は佛教を以て前者とせり、これ自力計度の繫縛の内にありたれば也、狐疑躊躇の黒雲に覆はれたれば也。この境界にありし時の我は煩悶に堪えざりき、苦惱に堪えざりき、世の煩悶苦惱に堪えやらで佛教に依りて慰められんとして其門を叩きし我等は其門の通路の難きに遇ふて苦惱の上に苦惱煩悶の上に煩悶を重ね而して時に我等にこの門に向はざりし前を羨み、この門を捨てんとせしこと幾度ぞや、大靈の如來よ、爾の御手は我等の肩に加はりぬ、將に去らんとする時、大慈の如來よ、爾は我等の後髪を捕へ給ひき、將さに捨てんとせし時、大慈の如來よ、爾は我等の袖を促へて放ち給はざりき、かくて我等は行かんとして行き得ず、去らんとして去り得ず、殆ど進退谷まりて絶望の淵に身を投けん、とせり、この刹那光明の如來よ、爾は我等の前にたちて正覺の大音を宣布して呼ひ給ひぬ、來れ救はむ、まかせ受取らむ、其處に臥してあれ

我抱き去らんと。此時我等忽然として夢覺めぬ而して呼ひぬ、佛教は明瞭なりき、信念は簡潔なりきと、これ他力の妙用によれば也、これ大靈の攝取を得たればなり。

大靈の如來よ、我等は今日爾の御法を以て簡潔なり、明瞭なりと呼ぶに至りしこと、偏に爾矜哀の賜なり、この恩徳謝するに辭なく、報ずるに道なし、たゞ御名をとなへて爾の御前に額つかんかな。

人體を刎上に横へて、こゝは手也、こゝは足なり、こゝは耳也、こゝは鼻也、こゝは肺也、こゝは胃也と解剖し盡して、何處に人間の生命ありやと呼ぶ者愚ならば、昨の我等は確に其愚をなしつゝ、如來の大法の生命を求めつゝありし也、思へば淺果なることなりけり、經文の一字一句を解釋し、八萬の法藏を了解し盡して後、佛教の生命を得んとせり、あゝ愚なりき、大靈の光明に依るなくして、いかてか佛教の生命を知り得んや、靈光に接せざる我等の理性何する者ぞや、感情何する者ぞや、意志何する

者○そ○や○我○等○佛○教○の○教○理○の○復○雜○な○る○を○云○ふ○は○我○等○が○靈○光○に○接○せ○す○し○て○
 小○な○る○理○性○や○小○な○る○感○情○意○志○を○以○て○佛○教○を○知○ら○ん○と○欲○す○れ○は○也○我○等○
 佛○教○の○教○理○の○亂○雜○を○い○ふ○は○誤○れ○り○こ○れ○佛○教○の○教○理○の○亂○雜○な○り○し○に○あ○
 ら○す○し○て○我○等○の○理○性○の○亂○雜○な○り○し○也○感○情○意○志○の○亂○雜○な○り○し○也○故○に○我○
 等○の○小○我○見○を○以○て○し○て○佛○典○を○研○究○せ○ん○と○し○て○徒○ら○に○哲○學○的○研○究○と○い○
 ひ○歴○史○的○研○究○と○い○ひ○科○學○的○研○究○と○云○ひ○し○は○殆○と○活○き○た○る○如○來○の○胸○に○
 小○刀○を○刺○す○に○類○せ○す○や○か○く○て○我○等○は○自○己○の○心○上○に○如○來○を○殺○し○佛○教○の○
 生○命○を○滅○し○去○り○て○而○し○て○云○へ○り○佛○教○の○生○命○捕○へ○難○し○佛○教○の○教○理○亂○雜○
 な○り○と○

如○來○よ○爾○が○既○に○知○ろ○し○め○す○如○く○我○等○は○か○く○の○如○く○に○し○て○爾○の○御○胸○
 に○銃○丸○を○投○せ○り○さ○れ○と○爾○は○之○に○怒○り○給○は○さ○り○き○怒○り○給○は○さ○る○は○か○り○
 に○あ○ら○す○し○て○爾○は○靈○光○を○我○等○の○上○に○放○ち○て○爾○の○光○の○内○に○爾○の○姿○を○拜○
 せ○し○め○給○へ○り○日○か○其○光○の○内○に○其○身○を○現○は○し○月○か○其○光○の○内○に○其○身○を○我○

等○に○拜○せ○し○む○る○か○如○く○大○靈○の○如○來○よ○爾○は○常○に○其○光○明○の○内○に○あ○り○て○我○
 等○に○身○を○現○は○し○て○我○等○に○頼○る○所○あ○ら○し○め○給○ふ○我○等○一○度○爾○の○靈○光○に○接○
 し○て○よ○り○復○雜○な○り○し○教○理○は○簡○潔○と○な○り○ぬ○亂○雜○な○り○し○教○理○は○整○然○と○な○
 り○ぬ○死○し○た○る○經○文○は○活○き○ぬ○乾○燥○な○る○法○義○は○趣○味○津○々○た○る○や○う○に○な○り○
 ぬ○

我○等○單○に○佛○教○に○對○し○て○か○く○の○如○く○な○り○し○に○止○ま○ら○す○宇○宙○の○事○々○物○
 々○に○對○し○て○か○く○の○如○く○な○り○ぬ○我○等○爾○の○靈○光○に○接○せ○す○し○て○宇○宙○の○現○象○
 に○對○せ○し○時○宇○宙○は○亂○雜○な○る○宇○宙○な○り○き○生○命○な○き○宇○宙○な○り○き○目○的○な○き○
 宇○宙○な○り○き○さ○れ○と○一○度○爾○の○靈○光○の○内○に○宇○宙○を○見○る○に○宇○宙○に○秩○序○あ○り○
 生○命○あ○り○目○的○あ○り○其○目○的○や○我○等○の○救○濟○な○り○其○生○命○や○我○等○の○安○慰○な○り○
 其○序○や○我○等○の○指○導○な○り○か○く○て○我○等○は○爾○の○靈○光○に○接○し○て○佛○教○の○教○理○を○
 大○宇○宙○の○現○象○の○上○に○味○ふ○に○至○れ○り○時○に○は○天○の○星○の○上○に○救○濟○を○見○時○に○
 は○夕○陽○の○上○に○安○慰○を○見○時○に○は○小○な○る○野○の○花○の○上○に○指○導○を○見○る○に○至○れ○

り。經典を誦して、如是の上に八萬の法藏を認め、我聞の上に七駄の經典を認むるに至り、一字一句の上に大生命と大安慰を認め、浩瀚なる佛典を繕ひて其簡潔を貴ふに至りしこと何たる光榮そや、爾の靈光によるなくんは我等は死したる宇宙にありて死したる佛教を誹りつゝ、生を終りしならんに何たる不可思議の因縁そや、我等自ら力なくして、今特に爾の恩寵を蒙り、爾の靈光の下に趣味ある生活をなしつゝあること感謝に堪えず。

佛教は簡潔也、佛教の信念は明瞭也、佛教は如來也、如來は大靈の慈父也、信念とはこの慈父に身命を託する也、八萬の法藏も之を説けり、七駄の經文この外に一語も説かず、阿含も之を説き、華嚴も之を説き、法華も之を説き、涅槃も之を説く、我等は今日爾の靈光の内に爾を拜するを得、爾の靈光の下にこの佛教の生命を得、宇宙の妙用を我等の有となさしめ給ひしこと何等の恩惠そや、あゝ、如來大悲の恩徳は、身を粉に

しても報すべし、小なるこの心を召させ給へ、汚れしこの身を召させ給へ、我等をして爾の御名に活かしめ給へ、犠牲として召させ給へ、大靈の慈父よ、願はく其御手に我等を導かせ給へ、南無阿彌陀佛。

六八。三九郎庄松問答

洛陽の三九郎、讃岐の庄松に。

問云く、その許安心せられしか。

答云く、安心せり。

問云く、如何安心せられしか。

答云く、自分は救はれぬと安心いたしたれば、佛は必ず濟ふと安心したまへり。

問云く、若問達は、如何がなさるぞや。

答云く、佛は我親なり、必ずよき様になし給ふべし。これ我が安心也。

六九。足らざる物は補はるべし

如來よ、我等の迷へる時に、爾の御心を知らずして、あの事足らずかの物足らずとて心を惱ますことあり。時にはこの煩悶のために世をはかなみ、人生をあちきなく思ふことさへある也。淺ましいかな、我等の心緒や。

されど、如來よ、爾の御心は忝いかな。我等がかくあの事足らずかの物足らずと心を惱ましつゝある間に、爾は他の方面より我等のなぐてならぬものを與へつゝおはすなり。然るを我等は常に爾の我等の安慰のために指導の爲めに與へ給ふ所のものを受けずして、汝か我等の爲めに特に與へたまはざるものを求めて心を惱ましつゝあるぞ耻かしき。

我等如來の御心に憑る者は幸なるかな。足らざることは補はれ、足らざる物は與へらるゝこと偏に如來廻向の他力の然らしむる所也。かくて我等は昌平の生活を續け行かる也。我等ある時は金の足らざることを憂えしことありき。此時爾は我等に金より一層我等を益するものを與へたまへり。我等ある時名の足らざることを苦しみしことありき。この時爾は名より一層我等を樂しましむるものを與へたまへり。或は又金の足らざる時に金を名の足らざる時に名を自ら求めざるに、爾の與へたまひしことすらありき。

世の人は大黒天の持てる、打出の小槌の自在を羨やむされど、我等は感謝す。大靈は我等に爾の御心を信するを得せしめ給ひしことを、我等か爾の御心の中に足らざるもの、常に我に取りて補はることを感謝せざらんとするも得ざる也。

* * * * *

七〇。年と別るゝの辭

年よ爾が去りて我等か住すとせんか又我等か去りて爾が住すとせんかどにかく今や我等は遠からぬ内に爾と別離を告げざるべからず我等向上の進路を爾の胸に借り來りしを今や爾は爾の後嗣を我等の道に残して何處にか去らんとす。

感謝す年よ我等は爾の賜物として多くの經驗と靈感を得たり爾の來りし時未だ我等が有せざりし多くの靈知と靈感とは今や爾の去る時に爾が遺物として我等に残れり日々に新なりとは我等如來に頼れるものゝ生活なるかなかくて我等は爾の胸の道に入りて多くの新なる教訓を得て爾に接せざる時よりも一層深く近く大靈の如來に接するを得たること改めて爾に謝せざるべからず。

行けよ年如來の御心に歸れいざさらば愛らしの年よ我等が心に殘

れ永遠の教訓は爾が面影ならずやいざさらば天晴れたり氣清冽也

積れる雪の溶けて地に流るゝと天に登るどの別れの如く我等はいまや爾と氣高き別離を告げんとすさらばいざ

靈的生活 終

明治三十七年八月五日印刷
明治三十七年八月十日發行

靈的生活與附
正價金三十錢

著者

浩女
代表者 佐々木 月

發行者

清水 金右衛門

印刷者

吉岡 嚴八

印刷所

大和屋印刷所



發兌元

東京市本郷四丁目
(電話下谷二〇三九番)

文 明 堂

賣捌所

名古屋
大坂市
備後町

川瀨代助
吉岡書店

京都市
西六條市
長野町

興教書院
西澤喜太郎

東京市日本橋區瀨戶物町六番地
(電話本局二四五番)



文學士清澤滿之先生著 四版

精神講話

定價三拾錢 郵稅四錢 郵券代用一割増

精神修養に關する自己の經驗を講じたるものを集めて一冊子としたるを本書とす。故に本書に向ひて高尚なる論議や、難澁なる理談を望む者は恐らくは、何等の得る處なからむ。

されど眞摯に自己の精神の修養に心かくる者、又は熱心に内心の安住を求むる者、一度本書を讀まば、其所得蓋し尠からざるべし。ともかくも本書は著者が精神上に實行しつゝあることを記したるものなるが故に、本書を讀む者亦精神を以て讀むべきなり。

文學士清澤滿之先生著 三版

精神主義

定價三拾錢 郵稅四錢 郵券代用一割増

月なき夜の道を行く、旅人が望む北斗星。罪に惱める弱者が胸に宿れる光明。

『精神主義』は苦みの谷をたざれる迷者が、慰めの光明を認めたる歎喜の叫びなり。

『精神主義』は社會に苦み、自己に惱める人が、導きの如來を信じたる安心の聲なり。

『精神主義』は宗教の記載なり、信仰の表白なり、救済の發揮なり。

『精神主義』は事實の記載なり、經驗の懺悔なり、我等の精神状態を有りの儘に表白したるものなり。

發 兌 元

東京市本郷區四丁目五番地

文 明 堂

文學士清澤滿之先生著 四版

精神講話

定價三拾錢 郵稅四錢 郵券代用一割増

精神修養に關する自己の經驗を講じたるものを集めて、冊子としたるを本書とす。故に本書に向いて高尚なる論議や、難澁なる理談を望む者は恐らくは、何等の得る處なからむ。

されど眞摯に自己の精神の修養に心かくる者、又は熱心に内心の安住を求むる者、一度本書を讀まば、其所得益し尠からざるべし。ともかくも本書は著者が精神上に實行しつゝあることを記したるものなるが故に、本書を讀む者亦精神を以て讀むべきなり。

文學士清澤滿之先生著 三版

精神主義

定價三拾錢 郵稅四錢 郵券代用一割増

月なき夜の道を行く、旅人が望む北斗星。罪に惱める弱者が胸に宿れる光明。精神主義は苦みの谷をたどれる迷者が、慰めの光明を認めたる歡喜の叫びなり。

精神主義は社會に苦み、自己に惱める人が、導きの如來を信じたる安心の聲なり、精神主義は宗教の記載なり、信仰の表白なり、救済の發揮なり。精神主義は事實の記載なり、經驗の懺悔なり、我等の精神状態を有りの儘に表白したるものなり。

發兌元

東京市本郷區四丁目五番地

文明堂

文明堂出版圖書

● 精神主義 文學士清澤滿之先生著 ▲第三版發行 ▲價三十錢

● 精神講話 文學士清澤滿之先生著 ▲第四版發行 ▲價三十錢

● 佛教講演集 南條、井上、村上、三博士著 ▲第五版發行 ▲價三十錢

● 青年之宗教 濱口惠璋先生著 ▲第二版發行 ▲價廿五錢

● 吾人之宗教 精神界記者曉島敏先生著 ▲第三版發行 ▲價廿五錢

● 貯金のすゝめ 金森通倫先生著 ▲第三十版 ▲價廿八錢

● 佛教講演集 文學博士村上惠精先生述 ▲第五版 ▲價二十錢

● 露西亞闇黑史 羽花仙史瀧江保先生著 ▲最新版 ▲價四十錢

● 信仰問題 文學士近角常觀先生著 ▲第二版 ▲價五十錢

● 心靈修養 濱口惠璋先生著 ▲第四版發行 ▲價四十錢

● 我宗教 トルストイ伯著加藤直士譯 ▲第四版發行 ▲價七十錢

● 強肺術 ベーカマン氏著杉村縱横先生譯 ▲第六版發行 ▲價三十錢

● 健腦法 Fクトル坂田實先生著 ▲再版出來 ▲價十五錢

● 通強眼術 ドクトル井上豊太郎先生著 ▲最新版 ▲價廿五錢

● 佛教通觀 文學博士井上圓了先生著 ▲上下二冊 ▲價五十錢

● 新公論 櫻井義隆先生主筆 ▲每月一回 ▲一冊十二錢 ▲郵稅五錢

文 明 堂 出 版 圖 書

文明堂は主として 教宗、哲學、教育、文學、其他有益なる新書を出版し併せて他書店の新刊物並に教科書、參考書を販賣す (一)の廣告により御注文の方は郵税不要 (圖書目錄入用の方は進呈す)

● 釋伽牟尼傳
文學博士前田慈雲先生著

訂正十一版
上製八十錢

● 大乘佛教史論
佐々木月樵先生著

訂正四版
上製七十錢

● 實驗之宗教
文學博士井上哲次郎先生著

訂正三版
上製六十五錢

● 日本佛教哲學
文學士高瀬武次郎先生著

訂正二版
上製八十錢

● 王陽明詳傳
教界偉人叢書第一編
小野藤太先生著

最新版
上製九十錢

● 弘法大師傳
教界偉人叢書第二編
境野哲先生著

最新版
上製六十五錢

● 聖德太子傳
文學博士南條先生著

最新版
上製六十五錢

● 小乘佛教史論
舟橋水哉先生著

最新版
上製五十五錢

● 耶蘇基督傳
海老澤名正先生著

第七版
上製六十五錢

● 續精神主義
文學士清澤滿之先生著

第三版
價四十六錢

● 佛領印度支那
文學博士高楠順次郎先生共著

最新版
價九十錢

● 佛典結集
文學博士松本文三郎先生著

最新版
上製八十錢

● 菩提達磨傳
文學博士井上哲次郎先生著

近刊
上製六十五錢

● 親鸞聖人傳
文學博士村上專精先生著

近刊
上製六十五錢

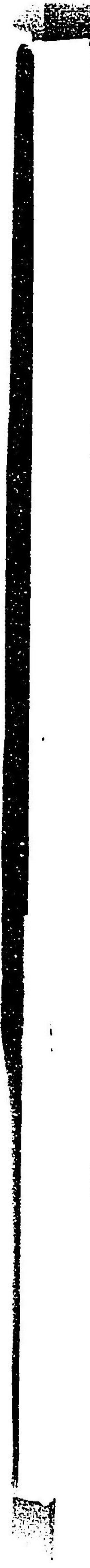
● 曇鸞聖人傳
濱口惠璋先生著

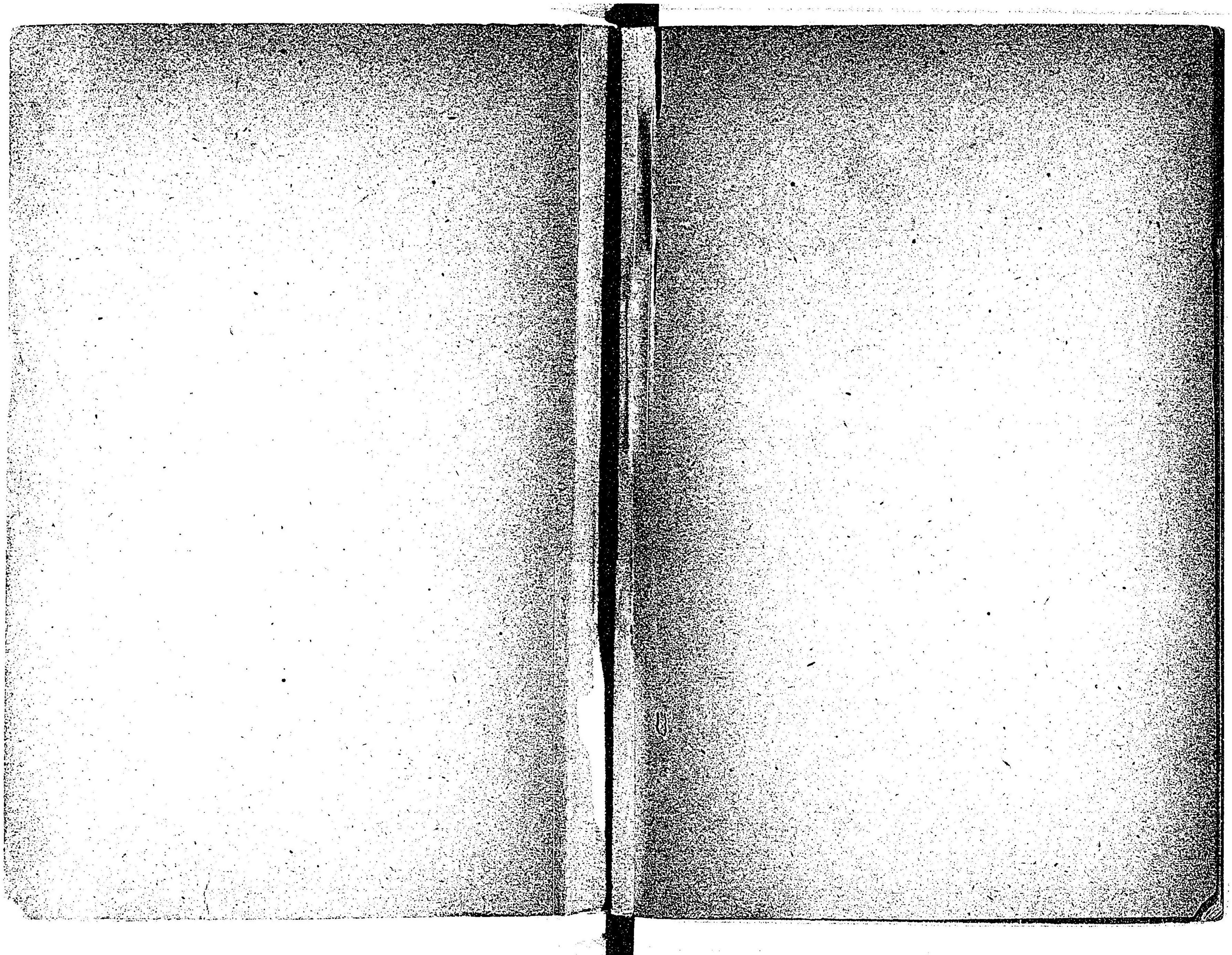
近刊
上製六十五錢

● 略述眞宗教史
文學博士前田慈雲先生著

近刊
價六十五錢

賣捌所 東京堂、上田屋、森江書店、松村書店、警醒社、林書店、川瀬代助、吉岡書店、興教書院、西澤喜太郎、積善館、福音社、富貴堂





文學士清澤滿之著

精神講話

正價三十錢稅四錢

文學士近角常觀著

信仰問題

正價五十錢稅八錢

堂明文